●国際連合大学 2013-2014 年国際教育交流事業●

中国教職員招へいプログラム

実施報告書

東京都・熊本県荒尾市・岡山県総社市・長崎県長崎市・和歌山県・大阪府

2013 年 10 月 20 日(日) ― 10 月 28 日(月)

国　際　連　合　大　学　（ＵＮＵ）

公益財団法人　ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002 年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。本事業のもと、同年、日中国交正常化 30 周年を記念した「中国教職員招へいプログラム」が開始され、同大学からの委託を受けてユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施を担当し、これまで多くの中国の教職員を日本に招へいしてきました。

今回の同プログラムは、国際連合大学による「2013-2014 年国際教育交流事業」として開催されます。ACCU は同大学の委託を受け、2013 年 10 月 20 日（日）から 10 月 28 日（月）までの 9 日間にわたり、中国の小・中・高等学校の教職員等 59 名を我が国に招へいしました。このプログラムは学校およびその他の教育・文化施設を訪問・見学することにより、日本の教育制度およびその現状についての理解を深め、ひいては、両国の相互理解と友好を促進することを目的としています。

実施にあたりましては、文部科学省、中国政府教育部、中華人民共和国駐日本国大使館、中華人民共和国駐大阪総領事館、外務省、および熊本県荒尾市・岡山県総社市・長崎県長崎市・和歌山県の各教育委員会、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多数の方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2014 年 3 月

国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目次

第Ⅰ章　実施内容

1.　全体プログラム（東京）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
2.　グループ・プログラム（各県・市）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
3.　全体プログラム（大阪）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

第II章　コメントと提案

1.　中国教職員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
2.　受入れ教育委員会（各県・市教育委員会）・・・・・・・・・・・・・33
3.　主な受入れ学校および機関・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

付録

1.　実施要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
2.　プログラム日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
3.　参加者リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
4.　関係機関リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
5.　文部科学省講義資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
6.　プログラム写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
7.　過去のプログラム実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78

第I章

実施内容

1. 全体プログラム（東京）

2. グループ・プログラム（各県・市）

3. 全体プログラム（大阪）

１.全体プログラム（東京）

1-1.来日、オリエンテーション（第１日目）

「中国教職員招へいプログラム」の参加者 59 名は、2013 年 10 月 20 日（日）に来日した。昨年秋に予定していた同プログラムが日中情勢の影響で延期になったため、約 2 年ぶりの実施となった。

同日、滞在先のホテルメトロポリタンエドモント 3 階「春琴」にて、オリエンテーションが行われた。公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）人物交流部部長佐々木万里子の歓迎のあいさつの後、それぞれのグループに随行する ACCU 担当スタッフが紹介された。最後に ACCU 職員よりプログラム日程説明や滞在ガイダンス等が行われ、参加者は全員、ホテルで夕食をとった。

1-2.開会式（第２日目）

プログラム第 2 日、10 月 21 日（月）は朝から開会式が行われた。はじめに中国教職員団を歓迎して、本事業主催者である国際連合大学大学院サスティナビリティと平和研究科の事務局長、秋葉正嗣氏よりあいさつがあった。本事業は日中間の友好と相互理解の促進を目的として実施されており、平和な社会の構築に向けて教育面から貢献するものとして大変意義のあるものだと述べた。そして、昨年来延期されていた本プログラムが、今回こうして再開できたことを喜ぶと共に、本年 6 月に中国政府の招待で、北京市および甘粛省蘭州市の学校・教育文化施設を訪問した際に会った先生方が今回の訪問団と一緒に来日しており、日本で再会できたことについても大変嬉しく思うと述べた。

続いて文部科学省大臣官房国際課から国際協力企画室長の永井雅規氏、ACCU より理事の山根隆氏、中華人民共和国駐日本国大使館より公使参事官の白剛（BAI Gang）氏のあいさつがあった。最後に訪問団を代表して団長の周卓瑩（ZHOU Zhuoying）氏は、「百年の大計は教育にあり、発展のポテンシャルは教育にかかっている。どの時代、どの社会でも、教育の発展が大きなカギとなり、日中双方が共に発展するという信念を持つことに重点を置いて今回の事業に臨むつもりである」というあいさつで会を締めくくった。

1-3.講義（第２日目）

「日本の初等中等教育」
文部科学省　初等中等教育局
初等中等教育企画課企画係長　栗山和大

開会式に続き、同会場にて、文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課企画係長栗山和大氏から「日本の初等中等教育」についての講義が行われた。

講義内容は以下の通りである。

1　・日本の基本的な初等中等教育制度
　・学校数、在籍者数、本務教員数
　・就園率・就学率の経年変化
　・義務教育制度の概要
　・教育行政制度の概要
　・教育委員会制度の概要
　・教育基本法の概要
　・学校指導要領
　・教員養成・免許制度の概要
2　・日本の現状認識と教育政策の方向性
　・日本の現状に対する認識
　・これから求められる力
　・現状認識を踏まえた教育政策

講義の後に設けられた質疑応答の時間では、「教員の配置、比率、教員の異動などの人事システムについて」、「学級の規模について」、「英語教育の目的について」、「教育指導のレベルの維持と評価について」など数多くの質問が挙がった。

1-4.歓迎交流会（第２日目）

文部科学省による講義の後、同ホテルの「万里」において歓迎交流会が開催された。文部科学省大臣官房国際課課長の今里譲氏

ほか、ACCU からは会長の張富士夫氏が出席した。

今里氏からは、日中両国の相互理解と交流の更なる促進のために、今回の日本での滞在期間中に得られた体験を、参加者自身が指導する生徒や同僚の先生方など多くの方に日本の姿を伝えて貰いたいとのあいさつがあった。続いて ACCU の張氏より、今回の訪問では、日本の教育、社会、文化のありのままの姿を、参加者自身の目、耳、肌で直接触れ、感じて貰いたいとのあいさつが送られた。

各代表あいさつの後、中国教職員訪問団を代表して長沙市教育局副処長周卓瑩氏から返礼のあいさつがあった。

記念品交換の場では、張氏から訪問団団長の周氏へ記念品が贈られ、周氏からも京劇瞼譜（れんぷ）の額絵が贈られた。続いて、今回の訪問団の秘書長である馬力（MA Li）氏へは文部科学省の今里氏から記念品が贈られ、馬力氏からは訪問団員の作品の書の掛け軸が贈られた。

ACCU 顧問の中野良子氏と理事長の田村哲夫氏による乾杯の音頭で歓談がはじまった。

1-6.都内視察、中華人民共和国駐日本国大使館教育処主催懇談会（第２日目）

歓迎交流会の後、一休みした訪問団は再集合し、短い時間ではあるが、東京都内の視察に出かけた。来日が初めての参加者も多いため、2 台のバスに分乗して都心をめぐった。訪問団員たちは中国語ガイドの案内で、車窓から皇居周辺や東京駅付近の歴史的建造物を見学したり、銀座の人波を見たりしただけでなく、東京タワーやレインボーブリッジなどの華やかな日本の夜景も見ることができた。

今回の訪問団は、このほか、中華人民共和国駐日本国大使館公使参事官の招待で、大使館主催の懇談会の機会を得ることができた。

夕食を済ませた訪問団は中華人民共和国駐日本国大使館教育処に向かい、公使参事官の白剛氏と教育部門の大使館員との懇談会に出席した。2 時間程度の意見交換の時間の中では、公使参事官より日本の文化や社会について、具体例をあげての説明があった。団員からは午前中の講義を受けて、日本の基礎教育の一番の特徴は何か、日本における家庭と学校の連携、地域間格差の現状についてなど多くの質問が挙がった。それらの問いに対して、日本人の集団を重んじる態度や他人に対する思いやりの心が平等な教育を生み、社会を大事にすることで平和を築いていることなどが説明された。実際に日本で生活している大使館員の話は、日本への理解を深めるのに大きく役立つものだった。

(1)A グループ

<u>東京学芸大学附属竹早小学校</u>

蘭州市第三十五中学校長の彭瑋（PENG Wei）氏をグループ長とし、14 名で構成された A グループは、10 月 22 日（火）午前、東京学芸大学附属竹早小学校を訪問した。

同校は今年創立 113 年を迎え、教員養成を目的とする国立大学法人東京学芸大学附属の学校の一つである。教育姿勢は「はじめに子どもありき」、「自己肯定感を育てる教育」であり、子どもの思いや願いを何よりも大切にし、その達成、実現のために教師は最大限の支援を心がけている。また、志願者が大変多く、その倍率は 70 倍となっている。

当日は、学校に到着すると、はじめに副校長の田中一明氏から歓迎のあいさつがあり、副団長の龔擁軍（GONG Yongjun）氏から返礼のあいさつがあった。続いて団員全員で授業見学を行い、低学年の国語、英語、中学年の国語、美術、高学年の音楽、英語、コンピュータの授業等を視察した。音楽の授業ではクラス全員による歓迎の演奏を受けた。また、2 時限後にある 20 分の休憩時間では児童たちが元気よく校庭でサッカーや野球をして遊んでいるところを興味深く見学した。

全ての視察が終わり、会議室に戻ると中国教職員から活発な質問が挙がり、田中氏はそれに対して丁寧に回答していた。田中

氏が「竹早小学校では生徒に成績をつけない」と述べると、それに対して、「どのように生徒の習熟度合いを管理するのか」、「教師の評価はどうするのか」等の質問があがった。田中氏は「授業で習う一つひとつの項目について教師が習熟度を管理している」、「教師は頻繁に会合してそれぞれのクラスの状況を把握するようにしている」と回答した。

中国教職員は生徒たちが授業にも遊びにも熱心で元気がよいことに感心しており、授業では生徒たちが集中して勉強する様子を熱心に見学していた。最後に記念撮影をして見送りを受け、一行は学校を後にした。

(2)B グループ

稲城市立稲城第二小学校

蘭州市第五中学校・高校校長の張忠蒼（ZHANG Zhongcang）氏をグループ長としたBグループ15名は、10月22日(火)、稲城市立稲城第二小学校を訪問した。

同校は141年にわたる歴史と伝統を持ち、学校の教育目標である「自ら学ぶ子」「心豊かな子」「たくましい子」を育て、自立を促すため、基礎・基本の徹底、人とのかかわり、郷土愛を育むための教育活動を行っている。持続可能な開発のための教育（ESD）を推進しており、2012年ユネスコスクールに認定された。

学校に到着すると、校長の松坂章二氏をはじめ、教育委員会委員長の小野好江氏、教育長の小島文弘氏ならびに教育委員会の職員一同より歓迎を受けた。松坂氏より学校概要についての説明を受けた後、体育館にて児童による歓迎会があった。ここでは卒業生が作詞した歌と群読が披露され、力いっぱい、息を揃えて詩を読みあげる児童の迫力に一行は圧倒されていた。

その後一行は2グループに分かれ、授業参観と校内施設見学を行った。授業参観では、一般基礎教科をはじめ、美術、音楽などの授業を参観することができた。給食を食べた後には意見交換が行われ、訪問団員からは総合学習の時間について具体的な進め方などの質問が挙がった。また校内には児童の作品や学びの成果が数多く展示されていたことなどから、これについても多くの質問や感想が挙がっていた。

(3)C グループ

聖徳学園中学・高等学校

湖南省の長沙市天心区湘府英才小学校校長の黄迎浪（HUANG Yinglang）氏をグループ長としたCグループ15名は、10月22日（火）午前、聖徳学園中学・高等学校を訪問した。

同校は、聖徳太子の「和」の精神を教えとした86年の歴史を持つ幼小中高の一貫校である。本プログラムでの中国教職員の受入れは今回で3度目となる。会場のホールでは、校長の伊藤正徳氏からのあいさつに続き、学校概要の説明があった。中国教職員訪問団からの記念品贈呈の後、一行は2グループに分かれ、昼食を挟んだ4・5時限目の授業を見学した。昼は、生徒たちが演奏する和太鼓を聴きながら、学生食堂で作られた温かいお弁当を食べた。食後の昼休みの時間を借りて、生徒らと中国教職員の懇談会が設けられた。中国教職員らは、はじめて日本の生徒たちと直接ふれあう機会を得て目を輝かせ、生徒らにたくさんの質問をしていた。午後は、体育館で剣道の授業を見学したあと、教室にて科学の授業をじっくりと見学した。中国教職員らは、生徒にノートを見せて貰ったり、英語で簡単な質問をしたりして、日中の共通点や相違点を熱心にメモしていた。

黄氏は最後のあいさつで、長沙市へ来る際はぜひ自分の学校にお越しください、と述べた。

別れ際、科学の授業を見せてくれた生徒たちや伊藤氏をはじめとする教職員たちは、一行が乗ったバスが見えなくなるまでずっと中国の旗を振り続けてくれた。

(4)D グループ

公文国際学園中等部・高等部

10月22日（火）朝、Dグループは公文国際学園中等部・高等部を訪問した。同校は、創立21年目の私立の中高一貫校である。

「自分で学び、考え、判断し、行動できること」と「自分とは異なる価値観や考え方をもっている人と交流できる」ことを目標とした教育を行っている。そのため、校則や制服もないのが特徴である。

学校へ到着後、校長の梶原晃氏の歓迎のあいさつがあり、グループ長の汪根林(WANG　Genlin)氏が受入れに関するお礼を述べ、記念品を贈呈した。次に、教頭の米山宏氏により、卒業生が製作したという中国語のパンフレットを紹介しながら学校説明が行われた。その後さらに、公文式の担当者より公文式についての説明が行われた。質疑応答では公文式の考え方や校内における携帯電話使用についてのルール等、幅広い話題について議論が交わされた。

その後、一行は全員で授業見学を行い、科学等の授業や学生寮を見学した。昼食は学生食堂で学校の教職員らと一緒に食べた。事前に公文国際学園の教員が実際の公文式の教材を中国教職員に見せに来てくれたため、食事をしながら、公文式について熱心に質問する団員らの姿も見られた。

昼食後、中国教職員は高校 2 年生の地理の授業に参加。小グループになり、通訳を介さずに生徒が中国教職員の名前や出身地、好きな食べ物等を把握し、全体の前で発表するという課題に取り組んだ。中国教職員や生徒は、互いに英語や筆談、ジェスチャーを駆使し、楽しみながら意志疎通を図っている様子であった。

訪問終了後、一行は温かい見送りを受けながら学校を後にした。

２．グループ・プログラム（各県・市）

2-1. A グループ：熊本県荒尾市

Aグループ 14 名は東京でのプログラムを終えたあと、10 月 26 日（土）までの間、熊本県荒尾市を訪問し、同市教育委員会の協力により、小学校、中学校、特別支援学校と、文化施設を訪問した。

荒尾市は、中国の革命家“孫文”とゆかりの深い宮崎滔天兄弟の生家があることから、市をあげて日中友好に熱心であり、本事業のほか、上海市で展覧会を開くなど日中交流にも取り組んでいる。荒尾市役所近くにある荒尾市宮崎兄弟資料館には孫文と宮崎兄弟の交流の様子がわかる資料を多く展示している。

今回の訪問では、荒尾市教育委員会の協力により、小学校、中学校、特別支援学校を各１校ずつと、上記の宮崎兄弟資料館、日本刀の製造工房である松永日本刀鍛錬所、熊本城等の文化施設を訪問した。学校・文化施設訪問の際には、荒尾市教育委員会教育部教育振興課指導主事の荒岡格生氏が同行した。

プログラム第 3 日の 10 月 22 日（火）、東京で東京学芸大学附属竹早小学校の訪問を終えた一行は、午後、東京から空路とバスを使って、宿泊ホテルのある荒尾市の隣の大牟田市へ向かった。

プログラム第 4 日の 10 月 23 日（水）朝、訪問団は荒尾市役所へ向かった。

表敬訪問は荒尾市役所会議室で行われ、荒尾市長の前畑淳治氏と荒尾市教育長の丸山秀人氏のあいさつがあった。

前畑氏からの「荒尾市は今までも熱心に日中交流を進めており、この度の中国訪問団の皆様を歓迎する。この訪問が更なる日中交流・友好につながると確信している」との言葉に続き、丸山教育長から「今回の訪問で、中国の教職員の方々からも色々な意見を頂戴し、互いに教育の向上を目指すことができれば素晴らしいと考える」とのあいさつがあった。

Aグループ長の彭瑋（PENG Wei）氏は、「初めての来日であり、日本の教育現場視察も初めてなので、日本の教育の特色を理解し良い点を学び、中国の教育現場に伝えたい」と述べ、記念品の交換が行われた。

その後、同会場にてオリエンテーションが行われ、荒尾市教育委員会教育振興課課長の前田修治氏より、荒尾市の概要および歴史、産業や地域の成り立ちについて説明があった。

続いて荒尾市が作成した中国語字幕つきの荒尾市紹介の VTR を鑑賞した。VTR でも孫文と宮崎滔天との交流が多く取り上げられており、あらためて荒尾市が中国との交流を大事にしていることがうかがえた。荒尾市教育委員会から同市の小中学校、特別支援学校の現状と、現在、市が抱える課題や目標などについて、パワーポイントを使った詳しい説明があった。

昼食をはさみ、一行は荒尾市宮崎兄弟資料館に向かった。

同館所長の安田信彦氏と中国人アシスタントの歓迎を受けた後、一行は宮崎滔天とその家族の孫文との交流の深さやエピソードについて詳しく説明を受けた。団員らは非常に熱心に説明を聞いていた。

次に松永刀剣鍛錬所に移動し、日本刀の製造方法を視察した。刀匠の松永源六郎氏から日本刀の製造法と特色について詳しく説明があった。その後、一行は製造方法を見学し、実際に 2 人の男性訪問団員が刃先を試しに打ってみたたりなどした。工房を見て回った後は居合い抜きの見学をし、最後には訪問団員が日本刀を構えて記念撮影を行った。

この日は午後 6 時より、ホテルブランカにて歓迎夕食会が催された。教育振興課課長の前田氏が司会を務め、主催者代表として、市長の前畑氏、市議会議長の迎五男氏、教育長の丸山氏があいさつをした。続いて A グループを代表して彭瑋グループ長からあいさつがあり、荒尾市教育委員会教育委員長境民子氏に記念品を贈呈し、境氏による乾杯の音頭によって賑やかに歓迎夕食会が始まった。

交流会には以前中国甘粛省蘭州市を訪問した先生や訪問予定の小学校、中学校、

特別支援学校の先生、宮崎兄弟資料館の安田館長等も参加した。隣同士になった日中双方の教職員らは筆談で会話を行い、すっかり打ち解けた様子で会を楽しんでいた。前荒尾市教育委員会教育部教育振興課の長原氏のサックス演奏、市長、教育長、グループ長をはじめとした訪問団の有志による、「北国の春」合唱、また、飛び入りで長沙市の先生方が伝統歌劇を披露した。さらには市長が先頭となり会場全員で炭坑節を踊り大盛況となった。最後に荒尾市校長会会長・緑ケ丘小学校校長の永尾則行氏より閉会のあいさつがあり、閉会となった。

プログラム第 5 日の 10 月 24 日（木）午前、一行は荒岡指導主事同行の下、荒尾市立八幡小学校を訪問した。同校は在校生 284 名、職員数 23 名（内教員 20 名）。創立は 1874 年で今年で 139 年目を迎えるが、築 6 年目の新しい校舎は広々として天井も高く設備も整っていた。また、以前荒岡氏が教頭を務めていたということもあり、とても和やかな訪問となった。

同校に到着すると、熱烈歓迎の横断幕が教職員を歓迎し、そのまま 1 階の会議室にて受入れ式が開催された。校長の山平敏夫氏のあいさつと、教頭の森川氏、担当教師の田中氏の紹介があり、訪問団の代表として副グループ長の龔擁軍（GONG Yongjun）氏が受入れの御礼を述べた。訪問団代表から記念品が渡されると、続いて他の訪問団員からも各地の記念品が渡された。その後学校概要の説明があり、校長の山平氏の案内の下、14 名全員で各学年の 2 時間目の授業参観を行った。全ての教室は明るく開放的で、一クラスの生徒数が少ないこと、廊下や踊り場が広々ととってあることから、校舎は余裕がある作りとなっていた。中国教職員は口々に、中国に比べて生徒数が少ない、明るくて綺麗、目が行き届く、遊ぶスペースが多くある等と感想を述べていた。

書道の授業見学では、団長、副団長が生徒の筆を借りて世界平和、日中友好、などの達筆な書を披露した。生徒や教員たちは大喜びで、口々に「記念品にする」、「手本として教室の壁に貼っておきたい」などと話していた。3 時間目は、3 グループに分かれ、児童との交流会を行った。低学年グループでは担当教師の指導の下で生徒が歓迎の言葉と歌を披露した。学校で行われている遊びを紹介し、中国教職員は生徒と“じゃんけん列車”という遊びを通して交流を行った。昼食時、一行は高学年 4 クラスに分かれて生徒たちと給食交流を行った。中国教職員は生徒たちがマナー良く配膳を行い、綺麗に食べるところを見て、勉強以外の教育も行き届いていることに団員らは驚いていた。

その後、会議室に戻り御礼とあいさつをした後、玄関で記念撮影をし、一行は同校を後にした。

同日午後、一行は荒尾市立荒尾海陽中学校を訪問した。同校は 2010 年 4 月に荒尾第一中学校と荒尾第二中学校の統合により発足した生徒数 852 名、職員数 62 名（内教員 48 名）の、熊本県北部では最大級の学校である。部活動も盛んで、運動系、文化系それぞれに多くの部員を抱えている。訪問時も練習が行われていたが、天気が悪かったこともあり、屋内練習中の多くの学生が声を上げて賑やかな様子だった。

同校に到着すると、一行はそのまま体育館に向かい、体育の授業を参観し、生徒たちの規律正しい集合、行進、駆け足などを視察した。教職員は健康的な生徒たちに感心し、心身ともに鍛えている生徒の様子を見て大変興味深そうにしていた。

体育館から教室に戻ると、教頭の益崎慎司氏の司会と生徒による琴の演奏の中、茶道部がたてたお抹茶とお茶菓子がふるまわれ、お茶の楽しみ方と琴について生徒から説明があった。中国教職員は、初めてのお抹茶の飲み方には戸惑いながらも、皆「美味しい」と声を上げていた。そこで校長の馬場陽一氏から歓迎のあいさつがあり、生徒たちからは海陽中学校の 1 年間の行事と普段の学校生活について紹介を受けた。

次に体育館で、文化祭の練習を見学した。全校生徒が一斉に歌う合唱を見ると、中国教職員は「全校生徒で合唱する、こういった練習は見たことが無い」と、とても驚いていた。その後は再び教室に戻り、荒尾海

陽中学校教師たちとの交流（質疑応答）が行われた。中国教職員は口々に「勉学と運動のバランス」、「指導要領の有無」等について質問し、逆に同校教師からは「中国教職員の校長先生の年齢や教師の格付け」等の質問が挙がった。質問に対し、同校は、「文部科学省の指導要領や荒尾市教育委員会の指導の下、教育機会の均等を目指している」と返答。中国教職員は、「教員は格付けされ、特に素晴らしいと選ばれた先生が再び教育を受けて校長になるので、若い校長先生もいる」と答えた。そして訪問団の代表として副グループ長の龔擁軍氏が受入れの御礼を述べ、A グループ長の彭瑋氏から記念品が渡された。続いて他訪問団の先生からも各地の記念品が渡された。その後、一行は音楽室に向かい吹奏楽部の歓迎の演奏を楽しんだ。そして最後に玄関にて記念撮影を行い、教職員に見送られながら一行は同校を後にした。

プログラム第 6 日の 10 月 25 日（金）の午前中は、指導主事の荒岡氏同行の下、熊本県立荒尾支援学校を訪問した。同校は 1979 年に開設された、知的障がいの児童生徒の教育を行う特別支援学校で、主として熊本県北部に在住する生徒が、小学部、中学部、高等部、重複障がい学級に現在 121 名在籍している。「たくましく・ほがらかに・のびやかに活動できる児童生徒」の育成をめざし、児童生徒の生活年齢や個々の発達や教育的ニーズに応じて文部科学省が定める学習指導要領に則り、教育課程を編成し 79 名（内教員 71 名）の教職員が校務にあたっている。

一行が到着すると教頭の西田昭雄氏司会の下で受入れ式が始まった。訪問団を代表して新余市特殊教育学校校長の肖菊蓮（XIAO Julian）氏から受入れに対する御礼のあいさつがあり、同校校長の中山氏から歓迎のあいさつが返された。

西田氏からは、「熊本県立荒尾支援学校の教育」と題して、日本における特別支援教育の歴史や熊本県の支援教育の状況、荒尾支援学校の教育目標、生徒数の推移等についての説明を受けた。記念品の贈呈後、一行は記念写真を撮り、その後 2 つのグループに別れ西田氏、高等部茶園主事の案内の下で校内の見学を行った。ここでは、年に一度の学校祭である「荒陽まつり」の準備を行なっている生徒たちを視察。重複障がい学級では、生徒 1 人に対して 1 人以上の先生が指導・対応にあたっているのを見ながら、中国教職員訪問団は一つひとつの教具や教材について、指導している先生に質問をしていた。教室棟を繋げる屋内の広場では卓球が行われており、中国教職員は得意のラケットさばきを見せてくれた。生徒たちも先を争うようにラケットを持ち、共に卓球を楽しんでいる様子であった。

会議室に戻ると再び肖菊蓮氏があいさつを行い、「すべての生徒が平等だ。素晴らしい教育を見た」と述べた。一行が帰る準備をしていると、校長の中山氏が訪問団員一人ひとりに生徒が作成したコースターと、当日撮影した記念写真を贈った。一行は大勢の児童生徒がさよならを言う中、同校を後にした。

昼食後、約 1 時間のバス移動で熊本城に着いた。中国では見られない形の城跡であるため、各所で記念撮影をしていた。ボランティアガイドの案内を通訳が中国語で説明し、一行は興味深く内部を見学していた。天守閣からは熊本市全体が良く見えたため、一行は盛んに写真を撮っていた。熊本城天守閣脇にある本丸御殿の最深部には、中国の故事に登場する王昭君の屏風絵があり、この点に関しても古くからの日中交流がうかがえた。

プログラム第 7 日の 10 月 26 日（土）、午前 8 時 30 分から荒尾市役所 3 階会議室にて 1 時間の情報共有会を行い、同時に 1 階会議室ではホームビジット対面式の準備が行われていた。ホストファミリー8 家庭とボランティア通訳 8 名は、対面式が始まる時刻には全員が集合しており、団員らはそれぞれの家庭へと向かった。

教育長の丸山氏からあいさつの後、約 2 時間半のホームビジットを終えて、全員が同じ会議室に再集合した。

団員と家庭双方が口々に楽しかったホームビジットでの出来事を語り合い、受入家庭からも「夜にゆっくり来て欲しかった」、「時間が短すぎた」などと感想があが

っていた。食品アレルギーがある先生を受入れた家庭も、「たくさん食べてもらい、たくさんお話もしていただいた」と話していた。中には別れが辛く、子どもが会議室まで一緒について来ていた家庭もあった。

一行は荒尾市教育委員会職員、ボランティア通訳、ホストファミリーに見送られながらバスに乗り込み、福岡空港に向かった。

2-2. Bグループ：岡山県総社市

グループ長である蘭州市第五中学校・高校校長の張忠蒼（ZHANG Zhongcang）氏が率いるBグループ15名は、10月22日（火）から26日（土）までの5日間、岡山県総社市を訪問し、同市教育委員会の協力のもと、小学校2校、中学校2校と、教育文化施設を訪問した。なお、同市による中国教職員の訪問は平成19年度、21年度、23年度に続き、本年が4度目となる。

プログラム第3日の10月22日（火）、一行は稲城市立稲城第二小学校訪問後、東京羽田から空路で岡山へ向かい、岡山空港からバスで宿泊先のコートホテル倉敷に到着した。

プログラム第4日の10月23日（水）午前、総社市図書館において、総社市長を表敬し、市長の片岡惣一氏より歓迎のあいさつが述べられた。続いてグループ長の張忠蒼氏より、「日中友好の懸け橋となる努力をする」という返礼のあいさつがあり、記念品交換を行った。中国政府日本教職員招へいプログラムに参加した、総社市教育委員会学校教育課主幹の森木浩介氏の進行により行われたオリエンテーションでは、教育次長の松尾一夫氏によって「総社市の学校教育」と題した同市の概要および教育についての取り組みが説明された。その中で、総社市には中国鎮江市金山寺で修行を行った雪舟が幼少期に過ごした宝福寺があること、また、名誉市民である故岡崎嘉平太氏が日中友好に力を尽くしたことなど、同市と中国との深い関わりについても紹介された。教育面においては、「言語活動を重視した分かる授業づくり」、「だれもが行きたくなる学校づくり」、「学校と家庭・地域との協働体制づくり」という3つのアプローチで取り組む学力向上計画「総社っ子輝きプラン」や、校種を超えて子どもが相互に支え合う活動「ピア・サポート」などが紹介された。質疑応答では、訪問団員から心理カウンセラーの人数、総合的な学習の時間の進め方などについて質問が挙がった。

午後は総社市立総社小学校を訪問した。同校は、故岡崎嘉平太氏も学んだ歴史ある学校である。体育館で行われた全校音楽集会では、中国教職員を歓迎する児童からのあいさつ、記念品の贈呈があり、続いて中国民謡「茉莉花」の合唱が披露された。美しい歌声が体育館に響く感動的な歓迎会であった。2グループに分かれ、公開授業を見学した後、図書館にて校長の上岡仁氏より学校概要説明があった。その後に設けられた質疑応答では、教員の評価、特別支援学校と特別支援学級の違い、登校拒否の児童に対しどのような措置をとっているか等についての質問が挙がった。意見交換を行った後は、体育館にて教職員同士のスポーツ交流が行われた。バトミントンや卓球など、日中の教員が共に汗を流し、白熱した試合が展開される場面も見られた。

プログラム第5日の10月24日（木）午前、一行は総社市立総社西中学校を訪問した。同校は生徒数762名、学級数27学級の大規模校である。部活動が活発で、各種大会・コンクールで県大会優勝や県代表等になるなど、多くの部が優秀な成果をあげている。

訪問時にはコーラス部による美しい合唱の歌声が訪問団を歓迎した。次に図書館にて歓迎行事が行われた後、校長の藤井和郎氏による学校説明があり、その後行われた意見交換では、学校の教育目標がなぜ、どのようにして決められたのか、ピアサポートの具体的な実施について等の質問があった。その他、発達障がいの生徒などに対し、集団の中でどのように個別に指導すればよいのかという課題が共有された。また中学校でやるべき最も重要で難しい課題は人間形成であるという点については、

納得・共感する思いであるという感想が述べられた。その後は合唱集会のリハーサルや学校施設などを見学し、最後に教室にて給食交流を行った。

この日午後訪問した、総社市立総社東中学校は、生徒数 876 名、31 学級の大規模校であり、「思いやりの心」を重点項目として設定している。部活動には約 90%の生徒が参加し、県代表として中国大会や全国大会へも出場している。

まずは校長の秋山達郎氏をはじめ、教頭の山内良子氏、副校長の板谷信昭氏、主幹教諭の小川広志氏、教務主任の横田貴弘氏同席の下、歓迎行事と学校紹介が行われた。懇談では、重点項目がどのような経緯で決まったのか、家庭科は必須科目なのかといった内容の他、部活動についても質問が挙がっていた。部活動見学ではバトミントン部、卓球部、剣道部で生徒が練習する姿を見学し、中国教職員が共に練習を体験し、生徒と交流する場面もあった。また合唱コンクールの練習として、生徒たちが中庭で歌う声が大変美しく、中国教職員は皆一様に感動している様子であった。最後に吹奏楽部による吹奏楽歓迎演奏が披露され、「北国の春」が演奏されると、中国教職員も歌声で応えていた。このように、今回の訪問ではスポーツや音楽を通じて心の通った交流が行われた。

プログラム第 6 日の 10 月 25 日（金）、一行は、日中友好に力を尽くしたことで知られる同市の名誉市民、岡崎嘉平太記念館を訪問し、日中友好の礎を築いた岡崎嘉平太の功績を学んだ。

その後、総社市立常盤小学校を訪問した。この日は大雨警報が発令され、児童が登校できず、歓迎の集いや授業見学を行うことができなかったため、時間を短縮して学校を訪問することとなった。

常盤小学校は、明治 20 年に尋常倍達小学校として設立され、現在創立 126 年を迎えた歴史のある小学校である。

校長室にて校長の大森真人氏より歓迎のあいさつを受け、児童が準備していた歓迎の手紙や手作りの記念品が贈られた。学校概要説明を受けた後、校内において情報共有会を行った。最後に、中国政府日本教職員招へいプログラムで中国を訪問した教諭の大賀俊彦氏より歓迎の言葉を受け、訪問団から校長に記念品を贈呈した後、学校職員に見送られて同校を後にした。

同日午後は、宝福寺、国分寺、きびじつるの里を見学した後、サンロード吉備路にて主幹の森木氏進行のもと歓迎夕食会が行われた。はじめに、総社市教育委員会を代表して教育長の山中榮輔氏による歓迎のあいさつがあり、続いてグループ長の張忠蒼氏が訪問団を代表してあいさつを述べ、記念品交換を行った。その後、総社市立総社西中学校校長の藤井氏による乾杯の発声の後、歓談となった。同夕食会には翌日ホームビジットで訪問する予定の受入れ家庭からも出席があり、家庭を訪問する前に互いを知ることのできる良い機会となった。中国訪問団より書の実演があり 榆中県恩玲中学校・高等学校校長の魏永勝（WEI Yongsheng）氏が「仁義以利人忠信代道之」と書いて教育長に贈呈した。その後、訪問団の自己紹介があり、参加者全員で中国民謡「茉莉花」を歌い、総社市教育委員会参事の三村和久氏による三本締めで夕食会は閉会となった。

プログラム第 7 日の 10 月 26 日（土）午前、一行はホテルをチェックアウトした後、総社市役所にてホームビジット対面式に出席し、受入れ家庭の家族と面会した後、各家庭を訪問した。各家庭では昼食を共にし、着物の着付けを体験したり、珍しい古酒をふるまわれるなど、貴重な体験をしていた。その他、中国に対する印象について、日本人に本音を聞いてみたい、日本人のありのままの姿を映像で撮って、中国にいる家族や生徒たちに伝えたいという目的をかなえることができたという参加者もいた。

総社市における全てのプログラムが終了し、バスで市役所を出発する時には、教育委員会の職員をはじめホームビジットの家族が大勢で「再見」「謝謝」などのプレートを掲げ、訪問団が見えなくなるまで見送っていた。

2-3. C グループ：長崎県長崎市

団長の周卓瑩氏（ZHOU Zhuoying）と秘書長の中国教育部馬力（MA Li）氏を含むCグループ15名は、グループ長の黄迎浪（HUANG Yinglang）氏を中心に10月22日（火）から26日（土）までの5日間、長崎県長崎市を訪問した。長崎市は、原爆被災地として恒久平和を希求し、市を挙げて平和教育、国際理解教育を推進している。また、同市は、歴史の面において海外との交流が古くからあり、16世紀のポルトガル船来航以来、異文化との接点として、龍舟競漕など中国文化も根付いている。

今回の訪問では、長崎市教育委員会の協力により、小学校2校、中学校1校、高等学校1校と、文化・平和施設を訪問した。

プログラム第3日の10月22日（火）の夜、一行は東京から空路で長崎市へ向かった。長崎空港では、長崎市教育委員会、訪問学校の教職員たちが掲げた真っ赤な「熱烈歓迎・中国教職員訪問団」の横断幕で出迎えられた。思いがけない歓迎に団員らは破顔して喜び、出迎えに対し感謝を述べた。明日からの職場や学校での再会を約束し、宿泊ホテルへ向かった。

プログラム第4日の10月23日（水）朝、長崎市役所で表敬訪問が行われた。

長崎市側から、長崎市長の田上富久氏、長崎市教育長の馬場豊子氏ほか多くの教育関係者の出席があり、市長の田上氏と教育長の馬場氏からあいさつがあった。田上氏からは、「よい未来を作るには、教育は最も大切である。長崎市は平和教育と国際理解教育に力を入れており、より良い未来のためには、子どもたちにどの国の人とも協力できる力をつけさせたい」と語った。また、田上氏の「中国で特に力を入れていることはありますか」との問いに対し、訪問団長の周卓瑩氏から「2つの“き”、つまり、“基礎学力をつける”、“基本的な技能をつける（生活体系を通じて自主性や創造性を養う）”を大切にしている」と周卓瑩氏が答えるなど、教育の重点項目ついて語り合う場面もあった。結びに、周卓瑩氏から「私たちの目標は“平和教育”と“日中友好”という点で一致している。今後も互いに手をとりあっていきたい」と語った後、訪問団を代表して団長の周卓瑩氏とAグループ長の黄迎浪氏から長崎市長への記念品の交換が行われた。

オリエンテーションでは、長崎市教育委員会から長崎市の地理・歴史・文化・名物などの紹介と、長崎市の教育概要や指導要領、施策が説明された。その後に行われた質疑応答では、訪問団員たちから、「市の学校数」、「職員の異動」、「生徒の進学」、「生徒の部活と先生の役割」など、多くの質問が出た。

その後、名物のちゃんぽん麺など地元の味を楽しみ、一行は原爆資料館等・追悼平和祈念館・平和公園等の平和施設へ向かった。各平和施設では、専門職員によって原爆の被害と人や環境への影響、そして恒久平和について中国語で詳しく説明がなされた。

23日の夕方にホテルセントヒル長崎で開催された歓迎夕食会には、長崎市教育委員会、訪問予定の学校関係者、ホームビジットの家庭関係者が中心に多くの関係者が参加した。会は日中の友好と親睦を深めるのを目的として構成されており、市内の大学留学生らがボランティア通訳として活躍し、日中の教職員交流を更に活発なものにしてくれた。

歓迎交流会では、開会の辞の後、長崎市立山里中学校合唱部の生徒らが、中国語で「茉莉花」などの歌を歌い、訪問団員らの関心を集めた。しばしの歓談後に訪問団一人ひとりが簡単な自己紹介を行い、終始笑顔の絶えない会となった。長崎市教育長の馬場氏が歓迎を込めて中国語で歌を披露し、それに続いて、日中両国全員が手をつなぎながら両国の言葉で「北国の春」を歌い、盛況のうちに会は終了した。

プログラム第5日の10月24日（木）朝、一行は長崎市立長崎商業高等学校を訪れた。同校は九州最古の歴史と県内公立高校最大規模の敷地面積を誇る公立商業高校である。

歓迎式典は広い視聴覚室で行われ、校長の松尾博臣氏からあいさつがあった。「本

校は（原爆の）爆心地から約 1km に位置するため、平和を願う心は非常に強い。教育は未来をつむぐもの。教育に携わる教職員が交流することは両国にとってより良い未来と環境を作ることだと思う」と述べた。続いて行われた記念品交換では、中国訪問団から水滸伝、西遊記、三国演義、紅楼夢の中国文学の代表作が贈られた。

VTR による学校紹介と質疑応答の時間には、大学進学と就職についての質問が訪問団員から多く挙げられた。

10 月 24 日（木）の午後、一行は長崎市立大浦小学校を訪問した。大浦小学校は大浦天主堂、グラバー園のすぐ横に位置し、長崎市内を一望できる高台に建っている。昇降口では児童達が出迎え、団員たちは児童らに手をひかれて、給食会場に向かった。代表児童が歓迎のあいさつがあり、訪問団の代表からも児童に向けて御礼のあいさつがあった。児童の「いただきます」の掛け声で、6 年生の児童 35 人と一緒に給食を食べはじめた。

昼食後に行われたアトラクションでは、5 年児童全員によるソーラン節の演舞と校歌斉唱が行われた。続いて代表児童から訪問団へ歓迎のあいさつがあり、それに返す形で訪問団員代表から児童へのあいさつが行われた。

午後は、特別支援学級を含む各学年の授業を自由に参観した。一通りの授業参観が行われた後、大浦小学校長の於保孝一氏から学校概要についての説明が行われ、このとき設けられた質疑応答の時間では、訪問団員から多くの質問が挙がった。

その後団員らは児童に連れられ、3 組に分かれてグラバー園・大浦天主堂を「さるく」をしながら巡った。「さるく」とは長崎弁で街や名所を観ながらぶらぶら歩くことを指す。今回は大浦小学校の 6 年生児童がさるくガイドとなり、グラバー園と大浦天主堂の建物や歴史を箇所個所で手造りの説明ボードで説明しながら案内してくれた。途中、台風の影響で残念ながら時間短縮となってしまったが、児童らのガイドによる「さるく」は訪問団員らの記憶に強く残るものとなった。

第 6 日となる 10 月 25 日（金）の朝、一行は長崎市立朝日小学校を訪問した。図書室で校長のあいさつが行われ、その後、教員に導かれ移動した。体育館では児童の花輪のアーチで出迎えられた。訪問団一行が入場すると、高学年の児童代表がはじめのあいさつを行い、続いて校長のあいさつがあり、それに対して訪問団の代表から児童に返礼が述べられた。

続いて行われた出し物披露では、低学年は歌、中学年は花笠音頭、高学年はよさこい踊りをそれぞれ披露した。児童たちがそれらを次々に元気に発表する様子に団員たちは笑顔で拍手を送り続けていた。

次に行われたゲームによる交流会では、児童と訪問団員らが中国語でジャンケンゲームを行った。勝者は相手のサインを貰い喜んでいたが、敗者は残念そうであった。その他、ケン玉、縄跳びを通した交流も行われた。盛り上がりも最高潮の中、全員の集合写真撮影で今回の交流が締めくくられた。

児童たちと活発に体を動かした後は、その熱気を体育館に残し、図書室に場所を移して意見交換会が行われた。校長・教頭・教務主任が出席し、校長と訪問者代表のあいさつを交えた後、学校紹介が行われた。その後の質疑応答では、勤務時間や教育についての実務的な質問が挙がった。その中で中国側の参加者が日中の小学校同士の友好を結ぶことを提案したことが、多くの参加者の記憶に残った。建設的な議論を通して、参加者は友好を促進する交流の成果を実感した。意見交換会は記念品の交換と訪問団員が描いた水墨画の贈呈をもって終了した。

最期は教職員と児童らが、団員らの姿が見えなくなるまで見送ってくれた。

25 日の午後は、最後の訪問地となる長崎市立片淵中学校を訪れた。同校は、外観は日本の伝統的な城の風貌だが、内装は近代的設備に彩られている。訪問団員はその違いに驚きながら、学校概要説明会場となる図書室へと向かった。

開会行事では校長と訪問団代表のあいさつ、そして記念品交換が行われ、その後

一行は日本の給食を配膳から見学した。
訪問団員らは6学級それぞれに分かれ、通訳を介さず直接生徒と昼食の交流、校内見学などを行い、各々が有意義な時間を過ごした。昼休みの残りの時間を使って、玄関前のホールで代表生徒による歓迎あいさつが送られた。それに続いて吹奏学部による歓迎演奏が行われ、最後には生徒との記念撮影が行われて交流が締めくくられた。
授業参観に続き、訪問団員一行は武道場、体育館、プール、各フロアー等を見学した。この時、学校と地域連携についての説明があり、訪問団員の興味をひいていた。続く意見交換会では、同校校長、教頭、教務主任は中国側訪問団の質問に回答することを中心としながら、学校概要の説明を進めた。その後の放課後の部活動見学では、体育系のクラブを見学し、訪問団員はバスケットボールクラブの活動等に一緒に参加し、生徒と笑顔を交わしながら汗を流した。

第7日の10月26日朝、一行は長崎市民会館へ向かった。会館では約1時間半の間、今回の訪問について意見を出し合ったり、報告会の発表準備をまとめたりした。一方、同会館の別室では、長崎市教育委員会の声掛けで集まったホームビジット受入れ家庭が対面式会場に集まり説明を受けていた。その後は対面式が行われ、大浦小・梅香崎中・片淵中・朝日小・生涯学習課の関係者たちが中心のホームビジット受入れ家庭と訪問団員らが対面した。
対面式の開催にあたって、日本側の参加家庭に市教育委員会から事前説明が行われた。通訳ボランティアとして長崎市内の中国留学生学友会から学生も一緒に参加し、日中の交流の支援を行った。長崎市教育委員会のあいさつが終わると、緊張をほぐす意味も兼ねてそれぞれのテーブルで自己紹介が行われた。自己紹介が終わり全体への説明が済むと、中国参加者は各々家庭を訪問し、3時間ほどを日本の家庭で過ごした。
各家庭では、メディアや研修旅行ではなかなか見ることのできない日本の一般家庭や、その食事・習慣、またテレビ番組等を通し、児童とふれ合いながら、教育への意識や家庭での取り組みを学んだ。
このホームビジットを最後にして、中国側の訪問団は帰国のために長崎空港へと出発した。市民会館で最後の見送りが行われ、中国語で「どうぞまた来て下さい」を意味する横断幕が広げられた。
長崎空港ではホームビジットの受入れ家庭の家族も見送りに来ており、一行は笑顔で「中国にもぜひ来て下さい」と言葉を交わし、空路で長崎市を後にした。

2-4. Dグループ：和歌山県

婺源県天佑中学校・高等学校の校長、汪根林（WANG　Genlin）氏をグループ長としたDグループ15名は、10月22日（火）から26日（土）までの5日間、和歌山県を訪問し、同県教育委員会の協力により、高等学校1校、中学校を併設した高等学校を1校、特別支援学校1校と、教育文化施設を訪問した。

プログラム第3日の10月22日（火）、一行は東京から空路で和歌山県へ赴いた。関西空港に到着後、バスで宿泊先のホテルグランヴィア和歌山へ向かった。

プログラム第4日の10月23日（水）午前、和歌山県庁南別館において和歌山県教育庁表敬訪問を行った。中国政府日本教職員招へいプログラムに参加した、児童生徒支援班長・前田成穂氏の司会進行の下、学校教育局局長の岸田正幸氏よりあいさつがあり、和歌山県は1984年に、中国山東省と友好関係を締結し、経済、貿易、文化、教育、科学技術等の各分野で協力関係を続けている、と述べた。また、孔子の言葉を引用した上で、和歌山県での滞在を大いに楽しみ、日中友好にとって、素晴らしい機会となることを願う、と述べた。続いて、汪グループ長は和歌山県を訪問できることへの感謝と訪問中の学びへの期待を述べた。その後、訪問団を代表して汪グループ長と岸田局長が記念品の交換を行い、和歌山県と中国教職員との友好を促進することができた。
次に、和歌山県教育委員会学校教育局の学校指導課長・田村光穂氏より、和歌山県

の概要および和歌山県の学校教育について説明があった。和歌山県の特産物、山東省をはじめとする中国の姉妹校提携が紹介された。学校教育については、「動く！和歌山の教育の創造」の 9 つの教育目標がある中、最も重要な 3 つの重点目標について紹介された。1 つ目の「学力の向上」では、問題解決型の授業の実践、2 つ目の「体力の向上」については、個人やグループでさまざまな運動プログラムに挑戦する「きのくにチャレンジランキング」が、3 つ目の「国際人の育成」では、和歌山の教材への活用や、英語ディベート大会やクイズ大会の実施等が紹介された。これらの取り組みは動画でわかりやすく紹介された他、山本尚子指導主事が、和歌山の民話を教材にした紙芝居を用いて小学校高学年向けの授業の実演を行い、参加者から拍手喝采が起きた。その後の質疑応答では、教員の人事、研修・留学制度、待遇等について活発な意見交換がなされた。

和歌山県滞在中の全ての日程で、指導主事の上出恵氏が訪問団に同行した。また、学校訪問には和歌山県国際交流協会書記の伊藤千夏氏も同行した。

まず、一行は和歌山県立星林高等学校を訪問した。同校は国際交流科を設置しているユネスコスクールであり、中国政府日本教職員招へいプログラムに参加した教諭の松本雅至氏の勤務校である。学校に到着すると、一行は早速中国語の授業を見学した。その後、校長の有本欽治氏から歓迎のあいさつがあり、記念品贈呈、学校説明が行われた。更に学生食堂に移動し、昼食をとった後は、意見交換会が開かれた。中国教職員からは、生徒の成績の付け方、教員評価、伝統文化保護等について質問が出た。星林高等学校からも質問が出たほか、有本校長より中国と日本の教育制度の違いをふまえた回答があったため、活発な議論を交わすことができた。質疑応答の時間が終了しても、熱心に有本校長と意見交換している中国教職員も見られた。

次の授業見学では、書道、音楽、体育等の授業を見学した。この日はあいにくの雨であったが、ダンス部等の部活動を見学することができた。最後は同校の職員に見送られながら、一行は学校を後にした。

学校訪問を終えてホテルグランヴィア和歌山へ戻った後、午後 6 時 30 分より、同ホテル 6 階「メゾングラン」にて歓迎夕食会が開かれた。和歌山県教育委員会児童生徒支援班長の前田氏の司会進行の下、学校教育局長の岸田氏より歓迎のあいさつがあった。次に中国教職員を代表し、グループ長の汪氏のあいさつが終わると、和歌山県立橋本高等学校の校長・北浦健司氏により乾杯のあいさつがなされ、和やかな懇談が始まった。各テーブルでは、各訪問団員が訪問先の学校教員との会話を楽しむ姿が見られた。懇談の途中で、星林高等学校校長の有本氏のあいさつ、和歌山の伝統芸能の東照宮御舟歌や、三味線組曲の披露があり、会場を盛り上げた。中国政府日本教職員招へいプログラムに参加した、児童生徒指導班長の前田氏、教諭の松本氏も出席する等、終始賑やかな 2 時間であった。中国教職員はこれから訪問する学校関係者との間にも親善関係を構築することができた様子であった。最後に、学校指導課長の田村氏による締めのあいさつの後、一同で記念写真を撮った。中国教職員は、他の出席者と再会を誓いながら会場を後にした。

プログラム第 5 日の 10 月 24 日（木）終日、一行は高野山を訪問した。高野山は、弘法大師空海が開いた真言宗の総本山である。高野山では、高野山異文化交流ネットワーク（KCCN）代表の松山典子氏が中国教職員を案内した。高野山の美しい紅葉を見ながら、壇上伽藍、霊宝館、金剛峯寺、奥之院を視察した後、昼食は南院というお寺で精進料理を体験した。中国教職員は、高野山と中国との関係を理解し、歴史に思いを馳せていた様子であった。高野山を下山し、この日は奈良県五條市のリバーサイドホテルへ宿泊した。

プログラム第 6 日の 10 月 25 日（金）、一行は和歌山県立古佐田丘中学校・橋本高等学校を訪問した。同校は、ユネスコスクール加盟申請中の中高一貫教育校である。

はじめに、教諭の西浦博之氏の司会進行の下歓迎式典があり、校長の北浦氏からあ

いさつがあった。その後、生徒会の生徒より学校概要説明があり、同校の学校生活や部活動、姉妹校交流についての紹介があった。中国教職員からの、「学業と生徒会活動をどのように両立しているか」という質問に対し、「日本では文武両道という言葉がある。それを目指して日々努力している」という生徒会長の回答があり、中国教職員は感激した様子であった。その後、一行は2グループに分かれ授業参観・施設見学をした。中国語の授業を見学したグループは、生徒の輪に入り一緒に中国語で交流を深めた。もう一つのグループは、数学の授業や施設見学をした。漢文の授業では、中国教職員が生徒に漢詩を朗読し、授業に参加した。

その後行った意見交換では、ICT、語学研修等の話題が挙がった。少人数で行ったため、教員の本音まで話し合うことができた。昼食は同校の教員と共にとり、ここでもさらに交流を深めた。最後に同校の教職員の見送りを受け、一行は学校を後にした。

その後、一行は和歌山県立きのかわ支援学校を訪問した。同校は、知的障がい教育と肢体不自由教育を併置した学校で、初等部、中等部、高等部の一貫教育を行っている。

到着後、体育館にて全校生徒が集まって歓迎会が行われた。歓迎会では校長の武内正晴氏のあいさつ、グループ長の汪氏のあいさつの後、全校生徒から愛唱歌である「かがやけいのち」の演奏や太鼓の演奏があり、中国教職員は感激した様子で鑑賞していた。その後の記念品交換では、児童生徒から一人ずつ中国教職員に記念品が手渡され、一行は大変喜んだようであった。訪問団員からも同校に記念品が贈られた。

歓迎会の後は、記念品を贈呈した生徒が各中国教職員を各クラスに連れて行き、共に授業に参加した。中国教職員は児童の歌を聞いたり、事前に学習した中国の地域、食べ物等について発表を聞いたりした。

その後行われた学校長との懇談では、障がいのある児童生徒に対して国からの補助があるか否か、先生一人当たりの児童生徒数はどうなっているか等について質問が挙がり、和やかな雰囲気で意見交換があった。更に設けられた教職員との交流の時間には、教員の異動、ダウン症の児童生徒の指導、進路等さまざまな話題について議論が交わされた。また、訪問団員の中の特別支援学校の教員から中国の特別支援教育について説明があり、日中両国の特別支援教育について双方が理解を深めた。

最後は互いに別れを惜しみながら、一行は学校を後にした。

プログラム第7日の10月26日（土）午前、一行はホテルグランヴィア和歌山をチェックアウトした後、同ホテル6階「シェグラン」にて情報共有会を行った。終了後、一行はホームビジットへ参加し、同会場にてホストファミリーとの対面式を終えた後、各受入れ家庭を訪問した。和歌山県教育委員会の上出指導主事をはじめ、教育委員会・学校関係者もホストファミリーを受入れており、中国教職員は各家庭でリラックスして過ごすことができたようである。

ホストファミリーの方々のお見送りを受け、一行は次に、バスで資源リサイクルセンター（株式会社松田商店）へと向かった。同センターは、県内の空き缶、ペットボトル、産業廃棄物等の処理、再資源化を行う株式会社である。はじめに同社社長の松田美代子氏からあいさつがあり、その後一行は和歌山県の小学生も環境教育の一環として訪れる「エコ・エデュテイメントパークくるくるシティ」を訪れ、体験活動を行った。その後、リサイクル工場を見学し、アルミ缶やペットボトルの再資源化の現場を視察し、和歌山の環境教育について理解を深めた。

３.全体プログラム（大阪）

3-1. 報告会（第 8 日）

プログラム第 8 日の 10 月 27 日（日）、大阪の会場にて報告会が行われた。式には、中国教職員 59 名の他、中華人民共和国駐大阪総領事館副領事の盛弘強氏、ユネスコ・アジア文化センター評議員の黒田浩利氏、顧問の中野良子氏が日本側来賓として出席した。

報告会では、各グループ代表より 20 分ずつプログラムの感想、成果等についての発表が行われた。各グループの報告は以下の通りである。

－A グループ－

はじめに、熊本県荒尾市を訪問したＡグループを代表し、副グループ長のの龔擁軍（GONG Yongjun）氏が報告を行った。まず、お礼のあいさつが述べられ、9 日間の訪問学校、教育文化施設、家庭訪問での友好・友情・子どもたちに感動を覚えたと述べられた。

訪問で得た日本の教育についての気付きについて 6 つの Jing（中国の同音字）に例え、一定の境地に達していると説明された。

竞（競：Jing）：生きる力。
　積極的でたくましく成長する子どもを育成。
　総合能力を養成：体育、美術等
　国際人材育成
　生涯学習の考えかた

敬"(Jing)：敬意を払う
　　自然に敬意を払う
　　人間・人格に敬意を払う
　　文化
　　仕事・職業：使命感・辛抱強く教育

精（Jing）：優れたもの
　　マネジメント：
　　インフラは安全で実用的
　　教員の訓練・評価制度
　　交流プログラム：きめ細やかな配慮・準備、時間の配分・名札・休憩等々

静（Jing）：静けさ・心穏やか
　　環境・品格：
　　生徒・教師とも教育制度を進歩させる
　　人事・給与：
　　地位にかかわらず同等に接する
　　包容力がある

鏡（Jing）：全体を把握すること
　　理論的に分析すること
　　少子化、高齢化、勉強嫌いについての研究
　　戦略的に目的をむける
　　現実を見て未来を見る

浄（Jing）：きれいな
　　環境がきれい
　　学校でのゴミの分別
　　上靴　あいさつをしっかり
　　互いに同等、穏やかな気持ちになる

日本の 6 つの境地が印象深く、今後参考にしたいと述べ、「中国では建国 60 年来義務教育は飛躍的に公平になっており、量から質、質の向上を目指している。今回の交流で得たものを中国の教育の向上に生かしたい。持ち帰って着手できることから試し、変革していくことが、さらに発展できる道に繋がる」と述べた。

最後は関係者への謝辞で訪問を締めくくった。

－B グループ－

次に、B グループを代表し、蘭州市東郊学校教師の徐世贇（XU　Shiyun）氏より報告があった。

本プログラムで得たものについて、以下のように話した。

・総社市長・教育長から学校教育の説明
・東京を含め、学校を 4 校訪問
・毎日の発見があり考えさせられた
・先生・児童から温かいもてなしを受けた
・演奏、言葉、中国民謡の歓迎があった

・見送り、あいさつ、雨の中でも手を振ってくれて感動した
・教育の価値で求めているものだと感動した
・すべての校舎は便利、きれい、シンプルで教えやすい機材が重要
・階段に標式・机にフック、工夫や便利さがよく分かった
・教育は児童のためにあるということ
・気付き：資源を大切に使う（椅子の足にテニスボール、ペットボトル蓋）
・多くの教室の壁に作品、成果、児童たちに表現の場を提供する
・子どもの個性が大きく伸ばされその成果がシェアされている
・人間が環境を作り、それが次の環境をつくる：シンプルであるべき
・先生方の熱意・純粋・心の教育・理念と行動：稲城市は子どもたちの自立を促す

教育目標：
・稲城市立稲城第二小学校　：
　　自習する子ども
　　心が豊かな子ども
　　自主的な子ども
・総社市立総社小学校：
　善良な子
　たくましい子
　自主的に学習する子ども
・総社市立総社西中学校：
　物・時間を大切にする子
・総社市立総社東中学校：
　思いやりのある子
・総社市立常盤小学校：
　誰もが行きたがる学校を作る
・稲城市の教育目標：
　家庭や地域・社会学習
・総社市の教育目標：
　共同学習（縦割り・学習意欲を伸ばす）

・品格教育、具体的な目標、特色のある教育、国際理解講座
・障がい児童のレベルに応じた対応：見捨てない　愛情ある教育
・笑顔があふれて生徒先生が幸せを共有できる楽園
・先生は愛と行動で実行　社会・民族に責任を果たす
・両国教育友情の向上を目指していきた
・隣人：心の知れた友がいれば世界どこにいても近く感じる

－C グループ－

続いて、C グループを代表し、長沙市芙蓉区育英第二小学校教師の焦英（JIAO Ying）氏より報告があった。
本プログラムで得たものについて、以下のように話した。

・文科省国連大学 ACCU の指導によりハードで秩序ある訪問：東京・長崎
・長崎市教育委員会、東京を含む５つの学校と教育施設を訪問した（原爆資料館・記念館・グラバー亭等）
・市長・教育長表敬、先生、生徒と深い交流ができた
・日中両国の文化は共通しているが、体制が違うことから異なる特性がある
・共通性があることからお互いから学べる、共に交流することで互いを参考できる
・初等中等教育の印象：ちりひとつない清潔で整頓されていた
・優しく友好的な笑顔・あいさつ

1.3 つの美点：
　教養の高さ、効率の良さ、都市の位置付けの高さ
① 国民の素養・教養の高さ：ACCU　ホテル従業員、先生、通訳含めて、礼儀正しく・細心の注意を払う・勤務時間を守る。
②社会管理の効率の高さ；交通治安、きれい、整然。賑やかな東京、地方都市・長崎、公道、裏道どこにも清掃作業員・ゴミ箱もないがガラス、窓、自動車等も清潔。きれい。
　節約・環境に対する意識高い；自治体は簡素・古い・多くの職員。蛇口から水が出るが圧力が少ない。ナイロン袋に石鹸・無駄遣いなし。給食は食べ残さない。ゴミを分別、自治体がリサイクル。雨水をトイレに。ソーラーパネルで太陽光発電。
③ 市のレベルの高さ：長崎の青写真、個性輝く世界都市、希望あふれる人間都市。

国際的視野品格の高さ：教育に基づくしっかりした基礎と先導している。

2. 教育の印象

①カリキュラム全人格的教育：
生徒の人格、調和のとれた発展。
体育教育を重視、力強い勇気、美的感覚。
クラブ活動：ほぼ 100%の生徒参加。
専任の教師が指導。

②人間的配慮・思いやりが教育の中で貫かれている。
支援が必要な生徒への配慮が綿密。
専門の教室・プレイルーム　専任教師の指導。大浦小学区は 7 人 4 教室プレイルーム。
3 人の特別支援員の配置。
1 クラスの人数が法律で決められている。
給食への助成：専門の栄養士、体の状態・育成程度、必要な栄養素を確保。

② 品格を高める：
しつけ、資源、残さない、迷惑をかけない。
自分たちができることは大人が助けない。
行き返りは生徒の徒歩。
給食時間にはこどもたちが配膳。

3．ハード・ソフトのバランスが良い

・市街地・僻地、大きな学校・小さな学校、ハード面は統一・整備、豪華ではない。
・必要なものはそろっている：保険室、プール、よく使用されている。
・ソフト面：指導要領に沿っている。
・長崎の教育指針がしめされている。
「あじさいスタンダード」
・教職員の異動：弊害が減る。市街地・郊外・学校間とのバランスをとれた発展。

最後に、「日本は謙虚さと内に秘めた熱さがある。これは民族が成熟・反映していることの表れである。教育はゆっくり花咲く過程である。長崎市で聞いた次のような言葉がある。『教育は土、家庭は水、環境は太陽、教師は肥料』である。肥料の時間と量・質が大事であり、知識人は批判を抑えるべきである。批判が多くてはいけない。いつくしみの心と態度、問題解決にあたるべきである。

一つひとつの種が土壌にまかれ、先進的な種をまいて肥沃な土壌のなかで値をはって花・実を結んでほしい」と締めくくった。

－D グループ－

最後に、D グループを代表し、グループ長の汪根林(WANG　Genlin)氏より報告があった。

はじめに、全体的な印象と交流の意義を述べられ、本プログラムで学んだことと気づきを以下の通り報告した。

・日本政府・自治体は教育を重要視
・先生方は誇りを持ち仕事に励む
・生徒はリラックスしており、明るい
・日本政府は教育を重視している
・初等中等教育はバランスのとれた発展
・国・自治体は学校の運営に対し十分な予算
・施設や設備は必要性を考えて設置
・公立高校・私立の学習内容はほぼ同じ
・都市部・郊外の学力の差もほとんどない
・教育長が配置し定期的に異動がある
・管理マネジメントは開きが出ない・平等な教育機会
・教育基本法を尊重。児童生徒の人間性を尊重し、カリキュラムも多様。生徒数も 40 名以下
・道徳教育・クラブ活動、一人ひとりへの適切な教育、特性に合った成長を遂げられており、これを学校が重視している。深い印象を得た。
・肢体不自由：きのかわ支援学校　豊かに生きる・教育目標
・効率の高い教育
・清潔・整頓・秩序が保たれている
・施設は完備しているが決して豪華ではない
・電気製品の生産王国にもかかわらずマルチメディアが重要ではない
・勤勉であり多忙にもかかわらずおもてなしができる
・期間中のきめ細かい手配
・日中両国の文化が違う点があるが高い初等中等教育を目指す気持ちは同じ
・全国民の教養を高めていく点も日中両国で一緒
・初等中等教育の問題：予算、教師の資質の更なる向上

・熱心に勉強しない生徒がいることも日中共通の問題
・改革発展を共にすすめ両国国民の更なる交流をめざす

最後に、両国の共通点はもちろん、相違点を理解するために、互いに交流していくことが重要であり、今後もさらに教育交流を深めていきたい、と述べた。

3-3. 閉会式

報告会に続き同じ会場にて、閉会式が行われた。

最初に、ACCU 評議員の黒田浩利氏よりあいさつがあり、今回のプログラムを通し、互いに交流を深め、情報を交換し、啓発しあったことは、今後の両国の教育発展にとって極めて大きな意義があるものであると述べた。また、同氏は教育長、教育委員長の連合委員会の事務局長でもある立場から、「このプログラムに深く関係している、自身の目で見て耳で聞いて、日本の教育の現状と課題に理解深められたのではないか。対話も多く持たれ、次世代を担う教員同士が交流を深めることには意義がある。体験・知見を教育現場に活かすと共に、地域の方、家族に伝えて欲しい。また、人脈を活かし、交流のすそ野を広げることを期待している」と述べた。

続いて中華人民共和国駐大阪総領事館副領事の盛弘強氏よりあいさつがあり、領事館を代表して、訪問団が大きな成果をもってプログラムを終えたことを祝すとともに、今回の訪問に際し日本各地の教育委員会より行き届いた手配を受けたことへの感謝を述べた。また、「この活動は 2002 年から 10 年に渡って、多く教職員が気付きを得、そして多くの人が交流を図っている。帰国後、中国の数万の先生、数十万の学生が、間接的に恩恵を受けられると信じる。この活動は、現代、今役立つもの、永遠にわたり積極的な意義のあることだと思う今回のプログラムでは、現場で比較教育の勉強し、理解を深めたと思う。ぜひそれぞれの教育現場に戻り、身を持って、言葉と行動で若い人に影響を与え、活かしていって欲しい」と締めくくった。

最後に訪問団を代表して団長の周卓瑩氏があいさつした。「『教師』という仕事はすばらしいものである。教育を通じて国民・人々が成長し幸福な人生を送ることができるよう導くことができるもので、これほど人の一生に影響を与え、未来に影響する職業は他にはない。我々は 4 つのグループに分かれ、各市の学校や家庭を訪問した。近い距離で直接交流し、共通の課題や問題に効率的で有効な回答を見つけたり、新しい課題に気づいたりすることができた。ひとことで教育というものを表すとすれば、それはまず、なによりも子どもを中心とし、自己肯定感を育てるということ。関係がとこしえに続くことを祈る」と述べ、関係者への礼とともに閉会式最後のあいさつを締めくくった。

閉会のあいさつの後、日本側からグループ団長 4 名に記念品の贈呈が行われ、閉会式は幕を閉じた。

第Ⅱ章

コメントと提案

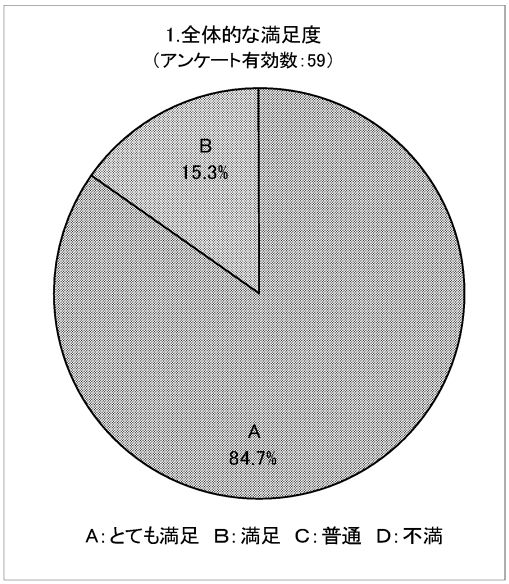
1. 中国教職員

2. 受入れ教育委員会（各県・市教育委員会）

3. 主な受入れ学校および機関

1. 中国教職員

◆質問１.全体的な満足度



【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩　（とても満足）
受入れ側はきめ細やかで、プログラムは合理的に組まれていた。応対してくれた方々はたいへん親切で、プログラム成果は大成功だった。

A-1　A グループ長　彭　瑋　（満足）
今回のプログラムは大成功だと思う。プログラムは綿密で、内容が豊富、教師と生徒が近距離で触れ合えた。荒尾市長ならびに教育長等関係者の方々が、今回のプログラムに大きな関心を寄せていたことに感動した。不十分だと思ったのは、ホームビジットの時間がちょっと短かったこと。話題によっては、もう少し話がしたかった。教師が教室に入って子どもたちと交流する機会も多くなかった。

B-1　B グループ長　張忠蒼　（とても満足）
サービスが行き届いていて、思いやりがあり、友好的で、親切なもてなしは居心地が良かった。

C-3　C グループ長　黄迎浪　（とても満足）
今回のプログラムに対する UNU、ACCU の手配はきめ細やかで、きちんとしており、内容も豊富だった。講義だけでなく、実際に学校を見学することができ、どのプログラムも目的が明確で、得たものは大きかった。印象的だったのは、長崎市長、教育長自らがこのプラグラムに参加し、行政機関がこのプログラムを重視し、日中友好を重視しているのだと感じた。

D-1　D グループ長　汪根林（とても満足）
(1) 段取りがきちんとしていた。
(2) 重点が明確だった。

◆質問２.参加目的は何か

【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩
日本の基礎教育（日本の「義務教育」と同義）改革の現状を深く理解し、両国の基礎教育のすぐれた経験を話し合い、両国の基礎教育の発展を促進するため。

C-2　中国教育部　馬　力
日本への理解を更に深め、日中の基礎教育のレベルを高め、日中基礎教育の発展と日中友好を促進するため。

A-1　A グループ長　彭　瑋
今回のプログラムは今年 6 月の日本側の中国訪問並びに蘭州の 3 つの学校訪問の後続プログラムでした。私も先進国の教育目標や教育理念、教育システムを知りたかったし、日本の文化を体験したかった。

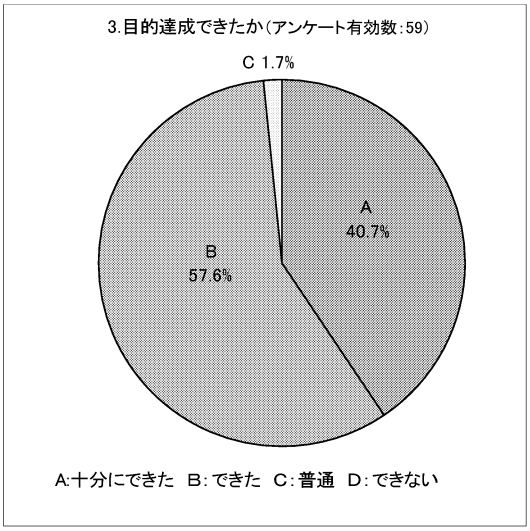
B-1　B グループ長　張忠蒼
両国の文化・教育の交流を促進し、日本の先進的な教育経験と成功方法を学ぶため。

C-3　C グループ長　黄迎浪
日本の基礎教育、文化を理解し、先進的な教育理念を吸収し、中日教育交流を促進するため。

D-1　D グループ長　汪根林
(1)日本の状況を理解し、日本の文化、教育、

生活、業務を体験するため。
(2)主に日本の高等学校教育の優れた点と直面している困難な状況を知るため。

◆質問３．目的達成できたか



【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩　（できた）
各学校の紹介を聞いたり、授業や施設を見学したりというこのような発展的な交流は、日本の基礎教育を身近に感じることができた。

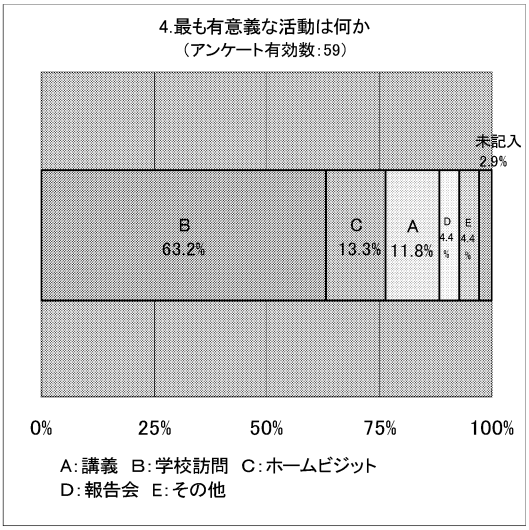
C-2　中国教育部　馬　力（できた）
日本の普通の小学校や中学校に行き、日本の管理部門の要員および教職員と直接触れ合えたから。

B-1　Ｂグループ長　張忠蒼
（十分にできた）
手配が行き届いていて、礼儀正しく親切であり、親密な交流ができた。

C-3　Ｃグループ長　黄迎浪
（十分にできた）
日本の教育理念は「人」が基本であり、学生が第一なのだと理解した。特に弱者にも十分に注意を払っているところがすばらしい。これら学んだことをお手本にする必要がある。

D-1　Ｄグループ長　汪根林　（できた）
学校、家庭、教育庁の方々などとの交流を通じて、良い体験ができた。

◆質問４．最も有意義な活動は何か



【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩　（学校訪問）
日本の基礎教育の発展現状を深く理解することができた。授業カリキュラム、教学理論や方法を把握した。中日両国の基礎教育の共通点および異なる点を理解し、分析することができた。

C-2　中国教育部　馬　力（学校訪問）
直接日本の教師や学生と触れ合え、交流できたから。但し、実際のところ、学校訪問とホームビジットは同じくらい重要。

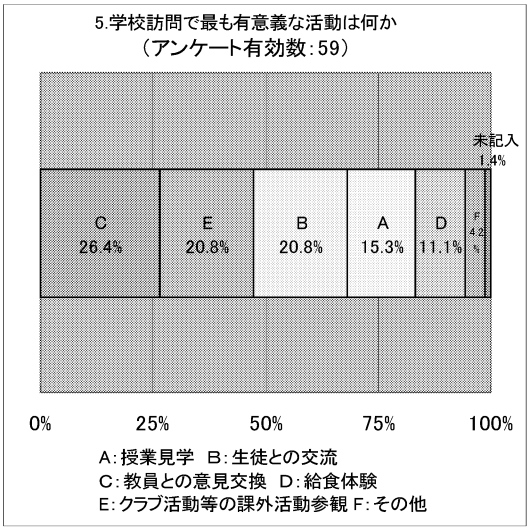
A-1　Ａグループ長　彭　瑋（学校訪問）
今回のプログラムで最も有意義なプログラムは、学校訪問だった。一つの事を体験して感じるためには、目で見て耳で聞き、手で触り、会話を交わして交流することが不可欠で、一つ足りとも欠かせない。学校訪問をすると同時に、校長先生や教頭先生からの説明に耳を傾け、我々自身が抱えていた問題に対しても解答してくれた。私たちは教員と生徒間の教えと学びの活動を直に見ることが出来た。この活動は非常に効果的だ。

B-1　B グループ長　張忠蒼　（学校訪問）
いろいろな方面から日本の学校の教育を体験できた。教室にてカリキュラム改革を知り、教師同士の交流により基礎知識を充実させ、学生の活動に参加することで学生の成長を感じることができた。

C-3　C グループ長　黄迎浪　（学校訪問）
全部で 5 つの学校を見学した。基礎教育のハード面、ソフト面やカリキュラムについて全体像を理解することができ、近距離で子どもたちと交流でき、共に給食を体験することができた。また、学校の教育理念や特色を見、聞き、質問し、直接知ることができた。

D-1　D グループ長　汪根林
（ホームビジット）
一つの家庭への訪問を通じて、日本人の生活、活動などを更に細かく体験することができた。交流はより具体的で、豊富で、いろいろな面を知ることができた。

◆質問５.
学校訪問で最も有意義な活動は何か



【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩　（教員との意見交換）
日中両国の教職員がお互いに質問し、回答し、意見を交換することは、共に問題を話し合う上で有効的な回答を得ることができる。また、それによって有意義な新しい課題が出てくることはエキサイティングだと感じた。

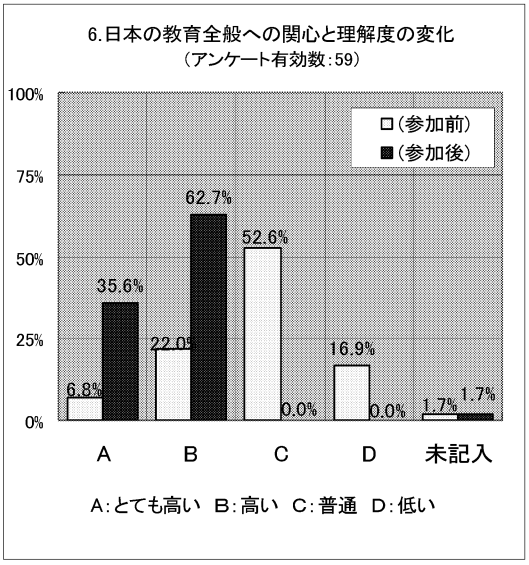
C-2　中国教育部　馬　力（教員との意見交換）
理由は質問 4 と同じで、交流を重視している。

A-1　A グループ長　彭　瑋
（教員との意見交換）
教員との意見交換は、彼らの教育に対する理解や採用している方法をすばやく、直接的で効果的に知ることができる。

B-1　B グループ長　張忠蒼
（クラブ活動等の課外活動参観）
実際の学校生活を見ることができた。学生たちが友達を作り、一緒に成長し、活動を通して絆や友好を深めるのだということが見てとれた。

C-3　C グループ長　黄迎浪　（給食体験）
給食体験は日本の食文化を知ることができただけでなく、学生の自主性や節約意識を見ることができた。また、行政機関が健康について関心を寄せていることもわかった。

◆質問６.
日本の教育全般への関心と理解度の変化



【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩
（普通→高い）
参加前は日本の教育と中国の教育は大体同じだと思っていた。
参加後の日本の教育の印象は、
(1) カリキュラムは学生の人格形成に重点をおいている。
(2) 人間らしさに配慮した教育を始終一貫して行っている。
(3) 学生教育において、習慣を身につけることを重視している。
(4) 硬軟両方に配慮し､バランスを重視して実用化している。

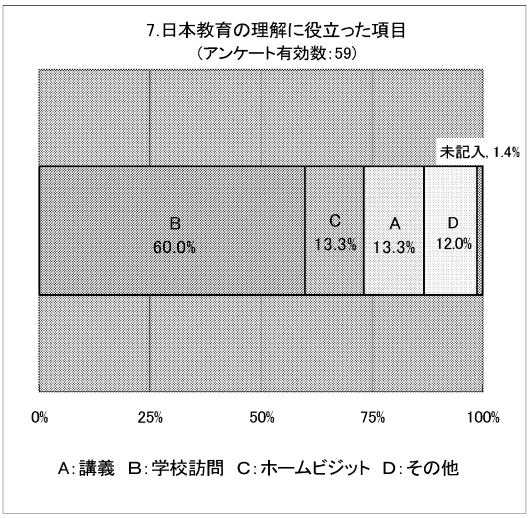
C-2　中国教育部　馬　力
（普通→高い）
参加前は全体の印象と部分的な理解があったが、直接交流することで更に理解が深まった。

A-1　A グループ長　彭　瑋
（普通→とても高い）
このプログラムに参加する前から、私たちの学校はアメリカ、スウェーデンとの教育交流があった。そのため、普段からアメリカ、スウェーデンの資料を集め、彼らの教育活動や教育改革の内容は知っていた。また幸運にも今回の 2013 年教職員日本訪問プログラムに参加したことから、日本の教育からも私たちが学ぶものがあることに気づいた。中国と日本では多くが同じ方法を取っているが、日本の教育理念と教育の効果はとても興味を引かれた。

B-1　B グループ長　張忠蒼
（高い→とても高い）
日本の基礎教育は、人間性を重視した教育を行って、個々の素質を見出し、個性を伸ばし、本来の姿でいられるようにしている。生活についての教育も重視して、生きていくための知識や技能も教えている。命の大切さ、安全保護、健康維持などといった生命についての教育も重要視している。また、地域教育も重視していて、学校教育と地域教育の密接なつながりにも力を入れている。

C-3　C グループ長　黄迎浪
（高い→とても高い）
プログラムに参加して、日本は、学校や校長の教育法方針だけに頼らず、家庭や地域といった社会全体で教育を行っているのだと深く理解した。また、長崎市の教育環境は整っていて、どの学校も「国際的視野」を持った人材の育成を行っていることがわかった。

◆質問７．日本の教育の理解に役立った項目



【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩　（学校訪問）
直接観察することで学校の様々な部分の本当の姿を知ることができたことは、とても成果が大きかった。日本の種々の教育改革や発展について直接手に入れた資料は、中日両国の基礎教育の共通点および相違点を分析し、日本の教育の精華を取り入れるのに役立つ。

A-1　A グループ長　彭　瑋　（学校訪問）
例えば社会国民の行動習慣、学校・学生の言動、家庭での子どもたちの態度など、いろいろなルートや方法を通じて、日本の教育を理解する必要があると思った。とは言え、教育の主な現場は学校であるので、学校は教育目標を掲げる、教育計画を立てる、計画を達成させる、教育の効果を考えるなど行う必要がある。そういったことか

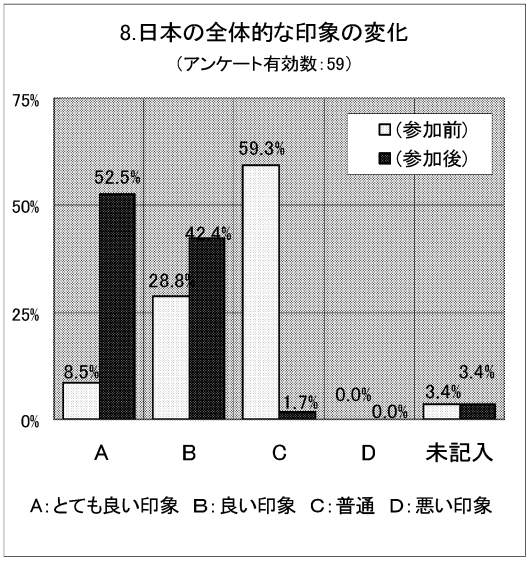
ら、学校訪問並びに教師や学生との交流は、日本の教育を理解するのに、重要な手段だった。

B-1　B グループ長　張忠蒼　（学校訪問）
小学校、中学校の状況や生活について、いろいろな角度から知ることができた。様々な交流から、日中両国の友好が深まった。

C-3　C グループ長　黄迎浪　（学校訪問）
学校訪問は、学校施設を直接見ることができ、校長先生の日本の教育に対する理解を直接聞くことが出来た。教育がどのように学生の品性や徳性、行動習慣を育てるのかを見ることもできた。

D-1　D グループ長　汪根林　（学校訪問）
学校訪問をすることで、更に深く日本の教育を理解することができた。

◆質問８．日本の全体的な印象の変化



【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩
（良い印象→とても良い印象）
国民の素質が高く、管理効率が高く、都市のレベルも高い。

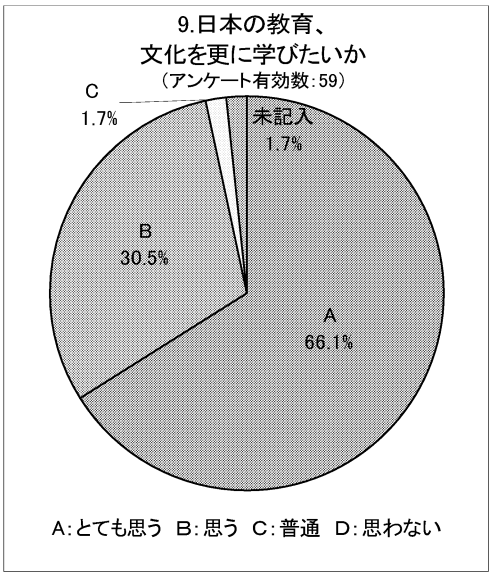
A-1　A グループ長　彭　瑋
（普通→とても良い印象）
以前は今の日本についてあまり知らなかったし、日本人と接触する機会も少なかった。今回のプログラムで私の日本全体の印象としては、清潔、整然、秩序がある。特に日本の方々が物事に対して厳格である点は学びに値する。

B-1　B グループ長　張忠蒼
（普通→よい印象）
日本人は勤勉で、賢い。教職員は親切で、優しく、人間性を重視した教育を行っている。外国人に親切で、国際理解があるのだろう。

C-3　C グループ長　黄迎浪
（とても良い印象→とても良い印象）
日本人は真面目で、厳密で、勤勉で、向上心があり、国民の資質が高い。ACCU 職員の仕事ぶり、人に対する態度からもそれらが見てとれた。

D-1　D グループ長　汪根林
（良い→とても良い印象）
プログラム参加後、更に日本人の文化、厳密さ、仕事への熱心さを実感した。

◆質問９．日本の教育、文化を更に学びたいか



【主な意見】

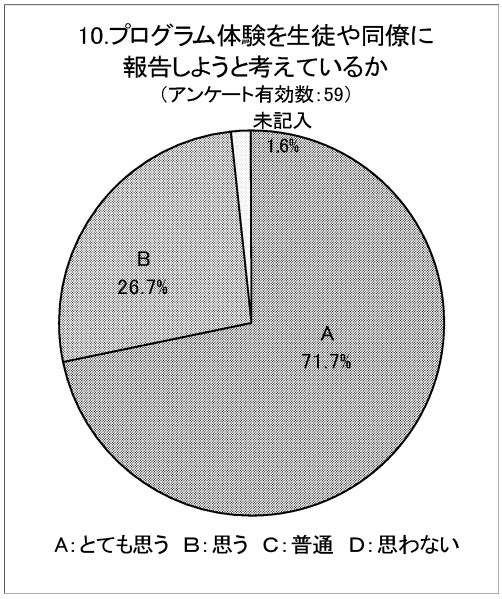
C-1　総団長　周卓瑩　（とても思う）
もっと深く知りたいと思う。日本の学齢

前教育の発展状況も知りたい。

A-1　A グループ長　彭　瑋　（思う）
　日本の教育と文化の長所を学び、己の短所を補いたい。

B-1　B グループ長　張忠蒼（とても思う）
　日本の教育は、学生の品性と人徳教育を重視している。良き人柄を養い、処世を学び、団体精神を大切にし、協力に対する意識や能力を育てている。これらを我々は学ぶべきだ。

◆質問 10.
プログラム体験を生徒や同僚に報告しようと考えているか



【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩　（とても思う）
　周囲の人々に訪日体験を話し、日本の先進的な教育理念と方法を皆で学び、日中両国の友好和平に貢献したい。

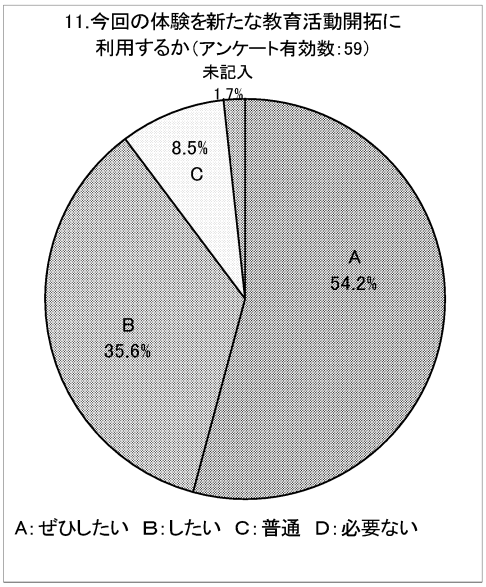
A-1　A グループ長　彭　瑋
（とても思う）
　帰国後、今回のプログラムで私が見て、聞いて、感じて、思ったことを同僚や学生に話し、日本の優れた部分を皆で学ぼうと思う。

B-1　B グループ長　張忠蒼（とても思う）
　教育のグローバル化。教師たちに国際的な視野も持って学ぶこと、日本の先進的な教育理論と成功方法をお手本にすることをメインに伝えようと思う。

C-3　C グループ長　黄迎浪（とても思う）
　日本の子どもたちが明るく、自主的で独立心の資質をもっていることと日本の教育精神、開放さ、博愛といった特質について、学生や教師たちに報告したい。

D-1　D グループ長　汪根林　（思う）
　両国の人々が互いを知り、理解し、友人になれるように努めたい。

◆質問 11.
今回の体験を新たな教育活動開拓に利用するか



【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩　（ぜひしたい）
　訪日プログラム、交流会を体験した団員それぞれが一粒の種となり、日本のよい教育理念や方法が各学校、各々の基礎教育の現場に伝えていくと思う。

A-1　A グループ長　彭　瑋（ぜひしたい）
　今回のプログラムで目にしたことを色々考えたいと思う。学校と地域を結びつけ、実際にそれを補う教育計画を作成し、学校と教育が不足している部分を整えたい。
　以下の 2 点について応用可能か考えている。

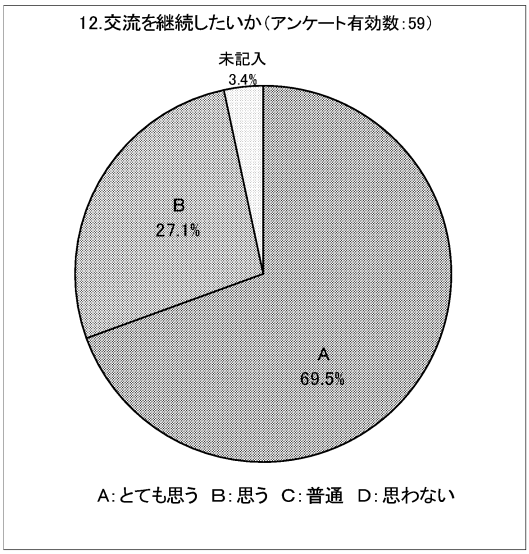
(1) 空間を作る。学校の壁、教室の壁に場所を作って、学生の作品を展示する。学生が自主的に計画する等々。
(2) 歩行が不自由な子どもや生活、学習が困難な子どもに更によく、更に親身になって配慮、援助をする。

B-1　B グループ長　張忠蒼（ぜひしたい）
今回のプログラムで見て学んだたくさんのことを帰国後、実状に合わせて有効利用したい。
(1) 学習とは生活に有用な知識である。学習即ち生活。学習は生活の一部であり、学習は生活を更に良くするためのものである。
(2) 地域教育の指導を強化する。学校と家庭の結びつきを効果的に促進させることによって、互いが平等で協力的になり、双方共にプラスとなる。これにより社会全体が円滑に運ぶ。

C-3　C グループ長　黄迎浪（ぜひしたい）
命や食べ物を作ってくれた人たちに対しての感謝を表す「いただきます」を利用したいと思う。子どもたちに食べ物は簡単に出てくるものではないことを理解させることにより、食べものを大切にし、他者を尊重することを教えたい。

D-1　D グループ長　汪根林（ぜひしたい）
学生の体験活動に力を入れたい。

◆質問 12. 交流を継続したいか



【主な意見】

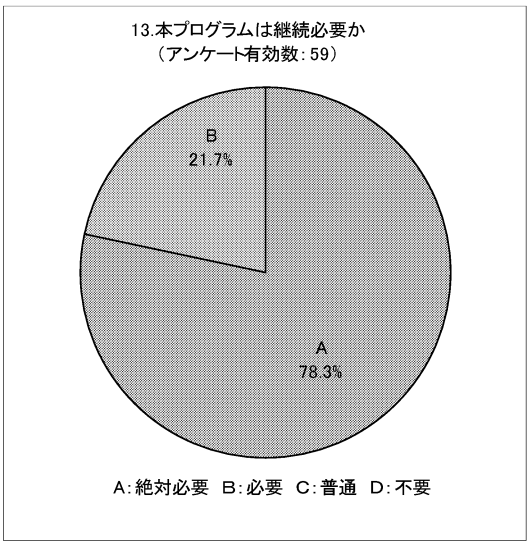
C-1　総団長　周卓瑩　（とても思う）
教育主管部門で働くものとして、日中両国の基礎教育の間での相互訪問、姉妹校締結などに力を入れたい。

A-1　A グループ長　彭　瑋（とても思う）
今回のプログラムは我々訪問団にとって大変実り多いものだった。これはプログラムの成功を意味するものである。このような交流プログラムは大変効果的である。
今後の交流について、日本側が訪中する、或いは中国側が訪日するにかかわらず、このプログラムを模範（基本）プログラムとし、これに加えて、日中双方が更にフランクな交流が行える時間を多く持つことが出来ればと思う。訪問にあたっては、事前に相手側に何か資料や視覚教材を準備してもらえれば、授業展開も可能となり、より学生に近づけるのではないかと思う。例えば日本の富士山や中国の長城の話などをして、訪問を充実させることができるのではないだろうか。

B-1　B グループ長　張忠蒼　（思う）
日本の学校および教職員との交流を継続したい。教師の相互派遣を行って、授業参観や模擬授業、教師や学生との交流、ホームビジットなどを通じて、両国の基礎教育の現状を理解し、基礎教育の発展につなげたいと思う。

C-3　C グループ長　黄迎浪（とても思う）
長崎市立大浦小学校との更なる交流をするつもりである。先ずは、校長先生と E-mail を通して管理、理念についての交流を不定期に行い、また子どもたちの作品交換などをして中日の学生の絆を深め、教師間のネットワークを構築して教育交流を行っていく。その上で、相互訪問を実施する。

◆質問 13. 本プログラムは継続必要か



【主な意見】

C-1　総団長　周卓瑩　（絶対必要）
両国の国民は基礎教育の理解を強化し、基礎教育の発展を速め、「世界人」、「創造性」に富んだ人材を育てなくてはならない。

A-1　A グループ長　彭　瑋　（絶対必要）
教育の国際化への発展は、他国の良い方法を見て、成功体験を学ぶことで、教育に携わる者が共通の意識を持つことができる。良いところ、先進的なところを自分たちの経験に活かす事が、世界中の子どもたちと世界の発展のためになる。

B-1　B グループ長　張忠蒼　（絶対必要）
互いを手本として学び合い、打ち解け、共に探求し高め合うことが、双方にプラスの結果をもたらす。

C-3　C グループ長　黄迎浪　（絶対必要）
中国の教師が更に日本の教育を理解し、日本の学校の先進的な管理理念や日本の教師の真面目な仕事ぶりを学び、更には如何に子どもたちの道徳、品性を育てるかについて知るために必要。

D-1　D グループ長　汪根林（とても思う）
互いを手本として、足りないところを補い合い、共に高め合い、友好を促進する。

◆質問 14. その他気付いた点

C-1　総団長　周卓瑩
国民の素質が高い
学生：活発、向上心がある、健康的、自信を持っている
教師：厳密、仕事熱心、教学レベルが高い
資源の利用法がすばらしい：大浦小学校は太陽光発電を行い、雨水を集め循環利用をしていた。

C-2　中国教育部　馬　力
ホームビジットの時間が今回は半日しかなかった。今後、ホームビジットには丸一日分の時間を割りふってもらいたい。そうすれば、更に親密な交流ができると思う。

A-1　A グループ長　彭　瑋
(1) 日本の特別支援教育はよく出来ている。
(2) 日本の教職員は職務を熱心にこなしていて、彼らの教師という職業に対する情熱に感動した。
(3) 教師が生徒に対して体罰を行うのは好ましくない。しかし、腕白な子どもに対してはどのように接したら良いのでしょう。決まった対処法があるのでしょうか、有効な措置があるのでしょうか。もう少し共に議論する必要がある。日本は教育先進国ですから、きっと近いうちに有効な方法を見つけるでしょう。

B-1　B グループ長　張忠蒼
礼儀教育がとてもすばらしい。国民の資質が高い。日本と中国の国民は友好的。

C-3　C グループ長　黄迎浪
大浦小学校がトイレで雨水を利用していることや片淵中学校が太陽光発電を利用していることなど、どの学校も資源の有効利用に力を入れていることに感心した。どの学校も施設設備が整っていた。

2. 各県・市教育委員会

Aグループ
荒尾市教育委員会
指導主事　荒岡 格生

プログラムの全体的な印象

- 歓迎交流会では、「北国の春」を日本語で歌って紹介したが、中国の先生方からも中国語で歌って返していただいた。また、市長自ら先頭で炭坑節を披露したが、一緒になって中国の先生方にも踊っていただいた。お互いが相手の国と立場を尊重している気持ちが伝わり、和やかな雰囲気の中で交流を深め、友好の絆を作り上げることができたと感じた。
- 見学先（日本刀剣の刀匠）からは、「国際交流は民間交流が基本で、大事。もっと活発に取り組んで欲しい」という励ましの言葉をいただいた。
- 中国の先生方からは、「日本はきれい」、「小学生の歌声がきれいだった」、「教育がどこでも同じで標準化されている」などの言葉を聞くことができた。日本の教育の良さを改めて感じる機会となり、これからも大切にしていかなければならないと感じた。

プログラム成果

- 日本刀剣鍛錬所での視察と体験、海陽中学校での茶道部と箏曲部での歓迎行事を通して、日本の伝統文化について理解を深めてもらうことができた。
- 各学校の訪問では、中国の先生方から積極的に質問いただき、また、学校側からも詳しく説明をしてもらい、日中の教育の違いやそれぞれの課題について共有できた。
- お互いの国の教育の特徴や良さについて改めて認識することができ、互いに教育者としての見識を広げることにつながった。

苦労した点

- 中学校の文化祭とホームビジットの日が重なり、市内中学校の全教職員がホームビジットを受入れることができず、ホストファミリーを探すのに時間がかかった。

Bグループ
総社市教育委員会
学校教育課 主幹　森木 浩介

プログラムの全体的な印象

- 今回の受入れは、平成19年、平成21年、平成23年に続き4回目であったため、継続した交流により、より一層友好が深まることが実感できました。今後も交流を定期的に実施することで文化面、教育面でさまざまな相互理解が促進され、さらに両国の絆を深めることができると思います。
- 歓迎食事会では、中国教職員の方々と、さまざまな会話を楽しみました。また、「北国の春」「まつり花」を全員で歌うことにより一体感が一層高まったと思います。
- ホームビジットの前に歓迎食事会を行ったことで、ホストファミリーと中国教職員の方々が事前に交流できスムーズなホームビジットにつなげることができました。
- 文化施設訪問では、中国にゆかりのある宝福寺（住職の講話、質疑応答）、岡崎嘉平太記念館（中国語でのビデオ視聴）、備中国分寺（楊貴妃の描かれたふすま絵見学）等を取り入れました。中国教職員の方々が興味深く見入ったり、熱心に質問されたり

する姿が印象に残りました。日本文化に親近感をもち、理解を深めていただけたのではないかと思います。

プログラム成果

- 小学校 5、6 年において、外国語活動が必修化されるなど、英語を通した国際交流学習に重点を置きがちですが、子どもたちの目をアジアに向け、隣人である中国の方々と交流できたことは多様な文化や価値観を受入れる素地を養うことにつながり、大きな成果があったと思います。
- 学校訪問では、各校がそれぞれの校種の特徴を生かした交流を工夫してくださり、大変充実した時間を共有できました。中国の方々への発信という活動を通して、改めて自国の文化や教育を見直す貴重な機会が得られたと思います。
- オリエンテーションや交流会での中国教職員の方々の積極的で熱心な姿勢には、同じ教育者として深く感銘を受けました。教育の向上という共通の視点をもつからこそ、交流の質を深めることができたと思います。

苦労した点

- オリエンテーションや歓迎交流会では、説明やあいさつが長くなりやや時間が不足しました。中国語に翻訳する時間も考慮し、説明等はできるだけ簡潔にするように心がけ、交流の時間をしっかり確保できればよかったと思います。

加えるとよいと思われる活動

- 今回は、児童生徒との交流として、音楽を通した交流（総社小の音楽集会、総社東中の吹奏楽歓迎演奏、総社西中の歓迎合唱）や給食時間の交流（総社西中）等があり、子どもも生き生きと活動し、中国教職員の方々にも喜んでいただけました。今後はさらに直接，児童生徒と質疑応答を行ったり、授業にゲストティーチャーとして入っていただくなど子どもたちと直接関わる交流を計画してゆきたいと思います。

プログラム改善に向けた助言

- 今回は中国教職員の訪問人数が当初予定の 30 人から 15 人となったため、ホストファミリーやボランティア通訳の確保の上でも余裕をもてたように思います。また、歓迎レセプションや学校訪問などの運営面でも、比較的スムーズな運営が行えました。

C グループ
長崎市教育委員会
指導主事　久松 千樹

プログラムの全体的な印象

- ホームビジット後のお別れのバスの中で、中国の先生方が涙を流されたり、ありがとうと大きな声で何度も言ってくださったりしたことは、今でも記憶に残っています。
- 私もそうでしたが、教職員ですので、子どもたちとの交流は心に残るものでした。可能な限り、交流体験を仕組むよう、学校と関係機関とともに努力していきます。

プログラム成果

- 受入れ交流校やホームビジット受入れ家庭が、温かく中国人教職員の方々に接する姿を間近にし、人とのつながりを大いに感じることができたことは、今後の交流への意識向上に大きく寄与したものであったと思われます。参加した関係者全員が同じ思いであるという報告を受けています。

苦労した点

- 関係校全て、好意的に協力していただきました。

加えるとよいと思われる活動

- 今回、平和施設訪問が、中国の方々にとってよかったのか正直分かりません。意義はあると思うのですが、実際、どんな印象や考えをもたれたのか・・・・・・長崎を知るという意味では、歩くという点においては難があるかもしれませんが、「長崎さるく」をしても良かったのかなと思っています。（その中で、昼食も自分たちで食べる等）

プログラム改善に向けた助言

- 他校からも意見として出ていましたが、ホームビジットが５時間設定できるために、今回で言えば、長崎に 26 日（土）もう一泊し、27 日（日）の午前便で大阪に出発が可能であればという、受入れ側の立場だけの意見です。

D グループ
和歌山県教育委員会学校指導課
指導主事　上出 恵

プログラムの全体的な印象

- 非常に有意義なプログラムであったと思います。プログラム中すべての訪問校や視察先で、中国の教職員の方々が非常に熱心に、質問などをされていたのが印象的であり、その意欲や態度に私たち日本人も学ぶところが多くあったと思います。
  個人的には、私は英語科の教員ですが、中国の英語の教員の方々が英語に堪能であったので、中国の英語教育が進んでいることを肌で感じました。

プログラム成果

- 実際に意見を交わしたり、ホームビジットなどで体験を共有したり、メディアを介さない交流を深めることによって、メディアの報道等は、事実の一部にすぎないということを再確認いたしました。中国の教職員の方々は、本当に友好を深めようとしておられ、それを言葉で、また身振り手振りで表現してくださいました。教員間の真の国際交流・国際親善が叶ったのではないかと思います。

苦労した点

- ホストファミリーの確保。政治的な情勢もあり、苦労しましたが、結果としては、皆さん非常にビジットを楽しんでくれました。ただ、もともと、国際交流に慣れており、ホストをよく引き受ける方々が多くなったので、もっと一般的にもどう拡げていくかが課題だと感じます。

加えるとよいと思われる活動

- 学校訪問を少し減らして、文化の体験施設などの訪問を多くするなど。和歌山県の場合は、学校訪問は 2 校程度でよいかなと感じました。

プログラム改善に向けた助言

- 国際交流事業は、文化の違いもあり、いろいろとご苦労されることが多いかと思いますが、非常に有意義なプログラムだと思いますので、事業が長く継続されることを期待します。

3. 主な受入れ学校および機関

Ａグループ（東京近郊）
●東京学芸大学附属竹早小学校
副校長　田中 一晃

プログラムの全体的な印象

- 皆さん、熱心な参観態度で感心しました。最近はあまりよろしくない日中関係ですが、このような交流を通して少しでも解消されればと願うばかりです。

プログラム改善に向けた助言

- 日中が対等の交流になるよう願います。

Ａグループ（荒尾市）
●荒尾八幡小学校
校長　山平敏夫

プログラムの全体的な印象

- 熱心に質問されたり、子どもたちと優しく交流されたりする姿に、教育者としての使命感や教育的愛情を日本の教師と同じように持っておられると感じた。
- 訪問団の方は大変礼儀正しく、親日的であると感じた。このような交流を通して偏見や予断が解消されていくと思う。

プログラム成果

- 子どもたちの中国に対する認識が変わった。中国についてもっと学びたいという子どもや中国に対する見方が変わった子どもが多数いた。
- 子どもたちが中国語を覚えたり、漢詩を覚えたりと中国の文化に触れることができた。

苦労した点

- 中国の先生方の名札を子どもたちが作成したが、見たことがない漢字で大変難しかったようだ。
- 対応する職員が少なく、訪問団の方の給食の準備に時間がかかった。PTA の方に支援をお願いする必要があった。
- 給食を子どもたちと一緒に食べていただいたが、通訳の方がいたほうがいいと感じた。（本校ではボランティアの方が対応した）

加えるとよいと思われる活動

- 中国の先生方によるミニ授業。（習字や漢字）
- 休み時間に一緒に遊んでもらう。

Ａグループ（荒尾市）
●荒尾市立荒尾海陽中学校
教頭　益﨑 慎司

プログラムの全体的な印象

- 中国から来られた先生方は若い先生が多く、教師としての力量を高めようとする意識を感じました。中国は教師の階級制度がはっきりとあり、そのことを自分のモチベーションを高めるためのものとしてポジティブに捉えていることが印象に残りました。

プログラム成果

- 学校現場の様子を率直に意見交換することができ、互いに抱えている問題点等を認識することに役立ちました。また、直接交流をすることができた生徒にとっては、視野を広げるいい機会となったと思います。

苦労した点

- 時期的に学校行事が目白押しで、慌ただしい時期と重なっていたため、直前の準備が不十分でご迷惑をおかけしたのではないかと心配しています。
- 中国の教職員の方々が期待する交流がどのようなものなのかを把握するのが難しくて、内容を検討する際に悩みました。

加えるとよいと思われる活動

- 可能であれば、中国の先生方と多くの生徒が交流する機会を持てたらと感じました。

プログラム改善に向けた助言

- 来校いただく先生方から、「日本訪問でどんな交流に期待しているか」、「何を見てみたいのか」などのお気持ちを、早い段階で訪問校に伝えていただけたら助かります。

Aグループ（荒尾市）
●荒尾支援学校
教頭　西田 昭雄

プログラムの全体的な印象

- 非常に熱心に施設及び授業風景の見学をされた。意見交換の時間では、自国（中国）の特別支援学校との違いについて率直に質問をされ、有意義な情報交換の機会になった。予定していた意見交換の時間が足りないくらいだった。
〈具体的な質問事項〉
・自閉症の子どもたちへの具体的な支援の方法について知りたい。
・本校へ就学する時の手続きの仕方、手順はどうなっているか。
・本校の教職員は特別な教育を受けているのか。そうでなければ、どういう過程を経て赴任するのか。
・人事異動（人事交流）はどうなっているか。
・教職員の研修制度はどうなっているか。
・小学校、中学校、高等学校の教職員等の学校間異動はあるのか。
・特別支援学校の教職員は、日ごろの仕事が大変である。特別な手当はあるか。特別支援学校から小学校、中学校に異動したらその手当はなくなるのか。
・地元の学校との交流はあるか。
・給与体系はどのようになっているか。　　など
- 本校到着時は非常に硬い表情であったが、次第に緊張感もほぐれ、見学時は盛んにシャッターを切って、教室の設営の様子、施設等を撮影しておられた。
- 中学部プレールームにある卓球台で中学部の生徒と卓球を楽しむという風景もあり、一気に相互の距離が縮まった。見学は 2 班に分かれて参加していただいたが、質問しながら熱心に観ていただいた。通訳の方も大忙しだった。
- 交流の終了が予定より 40 分オーバーしたが、使節団の方々には満足していただけたと思う。プレゼント交換の時間は一気に雰囲気が和んだ。握手をして分かれ、再会を誓い合った。中には、別れ際に涙した方もおられたと聞き、交流が深まったことを時間できた。
- 草の根レベルの交流の積み重ねの重要さを再認識させられる 1 日になった。

プログラム成果

- 特別支援学校の先生方もおられ、本校の教育について直に理解していたく機会が持てたのは非常に良かった。日本の特別支援教育の一端を理解いただく機会としても貴重であった。
- 相互の教育事情を知ることができ、有益だった。今後も、継続的に交流

を続けていきたい。

苦労した点

- 荒尾市教育委員会、ACCU の方の事前の説明、打合わせを入念にしていただいたので、当日までの準備、当日の運営は問題なく進められた。

加えるとよいと思われる活動

- 本校の授業の関係もあるが、各学部に入って子どもたちと交流していただく時間がとれたらよかった。

プログラム改善に向けた助言

- 今回の各学校への訪問が 15 人程度だったので、日程も余裕を持って組むことができた。交流の時間も多くとれ、使節団一人ひとりの満足度も高かったのではないかと思う。
- 実際に訪問して質問したいこともあるかと思うが、訪問前に、中国教職員からの質問事項をまとめてあると、事前の準備もできた。

B グループ（東京近郊）
●稲城市立稲城第二小学校
校長　松坂 章二

プログラムの全体的な印象

- 中国教育視察団の皆様が大変意欲的で、話題が子どもや教育中心であり、充実した話し合いをすることができた。
- 児童や学校のことを好意的にお話しくださりうれしく思いました。

プログラム成果

- 本校の児童、教職員ともども大変貴重な体験であり、外国からお客様がお見えになることで、自信になるとともに誇りに感じています。
- 教職員の海外教育視察への意欲も高まってきています。

苦労した点

- 授業を中心の視察を計画しました。質疑協議の時間が少なくなってしまったのが残念でした。
- 教員間での話し合いの時間がとれればもっと交流が深まったのではないかと思います。

加えるとよいと思われる活動

- 本校について言えば、滞在時間が短く教職員との交流の時間がとれなかったので、1 校での滞在時間がもっととれるとよいと思います。

プログラム改善に向けた助言

- 次に続く教員が意欲を燃やしています。今後も長期にわたり継続することを望みます。

B グループ（総社市）
●総社市立総社小学校
校長　上岡 仁

プログラムの全体的な印象

- 本校の児童及び教職員にとって心に残る素晴らしい交流の機会となりました。事前に 5 年生が作製した歓迎の垂れ幕を体育館と校舎内に掲示してお迎えしました。初めに、児童主催による歓迎の音楽集会を行いました。代表の 6 年生が歓迎の言葉を述べた後、事前に 4 年生が折って作製した鶴の首飾りを、代表の 1 年生が中国教職員にプレゼントしました。その後、全校児童で「まつり花」を中国語と日本語で元気よく歌いました。これに対して、中国教職員は「北国の春」を中国語で熱唱してくださいました。音楽を通して児童との心の交流を行い、楽しい時間となりました。5 校時目の授業参観に続いて、6 校時目には学

校経営の説明と質疑応答を行いました。質疑応答では、教職員の研修制度や人事評価制度、特別支援教育にかかる教員免許制度等について沢山の質問が出されました。熱のこもった情報交流の場となりました。放課後には、言葉の壁を越えて、中国教職員と本校教職員がスポーツ交流（バドミントン、卓球）を行いました。リラックスしてスポーツを楽しんでいる双方の教職員の様子が印象的でした。最後に、中国教職員と本校教職員が一緒に記念撮影をした後、代表の中国教職員から丁重なるお礼の言葉をいただきました。

プログラム成果

- 現在の日中の関係が難しい時期だからこそ、故岡崎嘉平太先生が学ばれた学校として可能な限りのおもてなしをしようと教職員で共通理解をして準備を進めてきました。児童が主体的に準備に取り組むとともに、当日の交流を心から楽しんでいる様子を見て、大変嬉しく思いました。
- また、本校で中国教職員をお迎えするのは 2 回目になりますが、前回お迎えした時の教職員はほとんど他校に異動しているため、教職員にとっては初めての経験でもありました。児童及び教職員にとって貴重な交流の機会をいただき、深く感謝申し上げます。今回の訪問交流が両国の友好の架け橋になればと願っています。可能であれば、本校と作品交流等を行う学校があれば幸いです。

加えるとよいと思われる活動

- 訪問校では、児童生徒との交流、教職員との交流の両方を日程の中に組み入れることが大切だと思います。

プログラム改善に向けた助言

- ぜひ、今後も継続して取り組んでください。

B グループ（総社市）
●総社市立総社西中学校
校長　藤井 和郎

プログラムの全体的な印象

- 中国の先生方を心から歓迎し、喜んでいただけてよかった。学校滞在時間が短かったため、落ち着いて協議ができなかったのが残念だった。

プログラム成果

- 今回は、生徒と直接交流していただく時間が給食時のみとなったが、通訳のいない教室で中国の先生方は本校生徒と積極的に関わってくださった。また、授業や合唱集会リハーサルなどを見ていただいて、日本の学校の様子を理解していただけたと思う。

苦労した点

- 中国の先生方の到着時と出発時に、生徒による歓送迎を計画したため、授業の間の休憩時間に到着、出発をお願いした。そのため時間調整が大変で、到着時にバス内で待機していただくなど無理をお願いした。

加えるとよいと思われる活動

- 事前に準備・調整が必要であるが、中国の先生方の何人かにゲストティーチャーのような形で授業に入っていただき、生徒たちに直接語りかけてもらうことができないだろうか。

B グループ（総社市）
●総社市立総社東中学校
教頭　山内 良子

プログラムの全体的な印象

- 中国教職員の方が大変熱心で、休憩する間を惜しんで、懇談会を希望されたのが印象的でした。「自由な教育ができるのか。上からの指導が入らないのか。」という質問に中国の管理的な体制が垣間見えました。「中国の子どもたちは家庭学習をしている」と、どの先生も自信をもって答えられる様子に本校との違いを感じました。

プログラム成果

- 台風接近の中、学校のスケジュールが変更し、生徒の活動の様子を十分に見ていただけませんでした。しかし、学校の雰囲気や歓迎･友好の気持ちをつたえることはできたと思います。

苦労した点

- 急な変更にも柔軟に対応していただいたので、よかったと思います。中国の方への手土産について事前に参考例を教えていただいていたので、助かりました。

プログラム改善に向けた助言

- 前回 30 名、今回 15 名の訪問でした。今回の方が、懇談も和やかで皆さんの様子も分かりよかったと思います。

B グループ（総社市）
●岡山県総社市立常盤小学校
校長　大森 真人

プログラムの全体的な印象

- 中国から派遣された教職員の研修意欲、都市や州を代表してきているという誇りと自信に圧倒される感じがした。男女に限らず優秀な教員は 30 歳代で校長になっている。児童数 2000 人以上の小学校は多く、1 学級の児童数も 60 人、70 人と聞いて驚いた。その子ども達が一生懸命に学習に打ち込む姿を想像すると、世界の大国になろうとしている中国の勢いが実感できる。

プログラム成果

- 受入前は大変不安であったが、メンバーは、このプログラムに参加して日本を訪問してみようと思うような教職員であるから、それほど身構える必要はなかったかもしれない。
- 中国政府やメディアの報道には、友好的なものが少なくなっているように感じているが、こうして教育に携わる教職員が直接ふれあう研修は大変有意義だと感じた。今回は、6 月に本校教員が蘭州市を訪問しており、私も視察団に少し親近感を持つことができた。人の行き来は大変重要である。チャンスをいただけるのなら、次回も本校からだれか教職員を参加させたいと思った。

苦労した点

- 私たちは、中国の教職員へ説明したり意見交換をしたりするために、通訳が必要である。そのため、全体的にそれぞれの活動に時間がかかる。それを想定したゆとりあるスケジュールを組んでおく必要を感じた。
- 当方からの質問に答えてもらえなかったことは、大変残念である。

加えるとよいと思われる活動

- 中国の教職員は、熱心にこちらの状況を把握しようとしている。受入れる私たちも中国の進んだ取組や教育の実情を聞きたい。是非日本側がレクチャーを受ける時間を確保し

てほしい。

- 受入れた教職員は、可能な限り関係者をホームスティさせるのが良いように感じた。昼食だけというより、やはり寝食を共にすることで理解が深まるのではないかと思った。

C グループ（東京近郊）
●聖徳学園中学・高等学校
役職　名前

プログラムの全体的な印象

- 今回は、これまで行っていた式典、授業見学とは形式を変え、本校の生徒や教員ができるだけ直接、中国の先生方に触れ合う機会を多く持つようにしました。
  - ・中国語のできる生徒が中国語で学校案内
  - ・英語の授業で、訪問団に直接現在の中国の英語学習状況を教えて頂いた
  - ・本校生徒と中国教職員が、通訳を介さず直接フリーディスカッションを行った
- やってみたところ、積極的な交流が双方の距離を縮め、浸透度合いの強いものになったと感じました。特に、生徒とのフリーディスカッションは、子どもたちの側に立って貰ってお話し頂けたことがよかったと思います。生徒とお話し頂いている際の中国の先生の表情が生き生きとされていたのが印象的でした。

プログラム成果

- 中国の先生方と、本校の生徒と教職員が交流し、中国の文化を直接に見聞きしたりできて良かったです。また、これまでの教職員訪問団受入の経験が今回生かせたように思います。

苦労した点

- 受入れを運営する側では、回数を重ねる毎に経験を重ね、年々やり易くなっています。
- 校内でも、このような交流をする際のチームを作って行動できるようになりました。
- 中国へ派遣プログラムで参加した先生の経験も生かし、今回は通訳を介さに生徒と中国の先生とのフリーディスカッションを行いました。やる前は、本校での実施は難しいのではないかと思いましたが、実際にやってみたら、その心配も不要でした。
- 中国語や英語や身振り手振りを使ったフリーディスカッションは、日本にいながらにして海外の文化に触れる良い機会となりました。生徒にとっても学習交流の場となり、良かったです。

加えるとよいと思われる活動

- 中国の先生方に授業をお願いできたらと思います

プログラム改善に向けた助言

- 事前打合せで ACCU とコミュニケーションしながら準備ができてよかったと思いました。
- 今後も子どもたちの元気にやっている姿を見て頂きたいと思います。大掛かりな式典などはできませんが、できることを模索して、やれるやり方で手づくり感のある受入れでお迎えをしていきたいと思います。

C グループ（長崎市）
●長崎市立長崎商業高等学校
教頭　田上 金壽

プログラムの全体的な印象

- 本校の紹介に対して、多くの質問をいただき、日本の学校教育に大変興味を持っていることを知ることができた。
- 中国の教育事情を聞けるような、意見交換のための時間配慮をすべきであった。

プログラム成果

- 日中友好に一助となれば幸いです。日本の教育に大変興味関心が高いことがわかり、教育に携わる本校教職員に大きな刺激となった。

苦労した点

- 文化祭前で十分な準備等ができなかったことに申し訳ないと感じています。

C グループ（長崎市）
●長崎市立大浦小学校
教頭　春野 伸幸

プログラムの全体的な印象

- 高学年が給食やアトラクション、キッズさるくで交流することができた。友好は，実際に人と人が交流することで図られるものだと実感した。

プログラム成果

- 短時間であったが、子どもたちの学習や活動の様子を見ていただいたり、交流する場を設定したりしたことで、中国教職員の皆さんも日本の学校の様子や子どもたちのことを少しは理解していただけたのではないかと思う。
- また、子どもたちにとっても中国の方々の迎える準備をし、実際に触れ合ったことで、外国からのお客様を心から歓迎する大切さや楽しさを理解することができた。また、実際に親しみをもった態度で接することができた。

苦労した点

- 児童の準備時間の確保

加えるとよいと思われる活動

- 日本の文化やその地域の様子を理解していただくためにも、そのようなものがわかるような場所や施設等を見学していただくことも大切のように感じる。

プログラム改善に向けた助言

- 見ていただくより実際に子どもたちと交流する時間を多くとることがよいと思う。
- ホームビジットの時間が短かったので、30 分でも長くなるとよい。

C グループ（長崎市）
●長崎市立朝日小学校
教諭　宇土 剛

プログラムの全体的な印象

- 滞在した時間以上に中国教職員団の先生方との距離の近さを感じました。水墨画の授業に自然に参加し、違和感もなく、「日本と中国の文化交流の歴史の厚みだなあ」と思いました。
- 今回の交流会が子どもたちにとって、とてもプラスだったと思います。計画・準備は大変な部分もありましたが、担当の私は中国を訪問していたこともあり、自分が訪問した時にどんな活動が 1 番心に残ったかを

思い出しながら計画を立てました。子どもとのふれ合いという点は、朝日の交流でははずせないと思っていました。中国の先生方が気持ちよく訪問できたらいいなと思いました。また朝日の子どもたちにとって、すばらしい時間になってほしいと願いながら計画していきました。このような教育の交流こそ、日中の友好・平和につながると信じています。すばらしい機会となりました。

プログラム成果

- 朝日小の先生方はとても好意的で、自然体で、いい交流会になったと思います。
- 子どもにとって大きなプラスだったと思います。国際交流を何度か行っていますが、中国の方に自分たちの文化を知らせたり、また相手の文化を知ることは、とてもすばらしいことだと子どもたちの感想の中にありました。

加えるとよいと思われる活動

- 児童との意見交換会などもおもしろいかもしれません。

プログラム改善に向けた助言

- ホームビジットの家庭での滞在時間がとても短く、もう少し長いたいいと思いました。主人の母と私の母も一緒にお迎えしましたが、着物を着たり、料理を一緒に食べることができてとても楽しい時間だったようです。中国の先生（ゾウさん）と通訳の方との出会いに感謝します。
- ホームビジットは家族 4 人で迎えました。新鮮な話ができたこと、そして、中国の新鮮な話を聞けたことは、私たち家族の宝物になりました。子どもはピアノでモーリーファンをひき、ジャオインさんと一緒に歌いました。また、家内は一緒に空港まで見送りにいくと行ってくれました。「思い出に残ってよかった……」と話していました。

C グループ（長崎市）
●長崎市立片淵中学校
教頭　福浦 豊治

プログラムの全体的な印象

- 準備段階でいろいろと変更や追加事項が出てきて、その対応に時間を取られた。ただ、実際に受入れてみると、当初考えていたよりも互いのことを理解することができ、教職員にも概ね好評であった。

プログラム成果

- 中国に対する理解が深まったこと。また, 中国の方の日本に対する見方を知ることができたこと。
  生徒たちの国際交流に関する理解が深まった。

加えるとよいと思われる活動

- ホームビジットはもっと時間がほしい。せっかくの機会なので、もっと話をしたい・聞きたいこともあったし、見せたい場所等もあった。

プログラム改善に向けた助言

- 受入れに関しては今後も前向きに考えたいが、準備等かなり手のかかる所があった。簡略できるところはもっと簡略してもらえるとありがたい。（やむを得ない状況があったとは思います。無理を承知で書いています）

C グループ（長崎市）
●長崎市立梅香崎中学校
教頭　林田 俊澄

プログラムの全体的な印象

- 夜のレセプションでは、楽しい時間を過ごすことができました。私自身、これまで中国人への理解がなかったため、このレセプションに参加したからこそホームビジットで温かく心から迎えることができたと思っています。

プログラム成果

- 中国人と直接対面して、先入観だけではなく心から親しくコミュニケーションがとれました。
- 私が個人的に外国に行った中で、現地の家庭に招待されて食事をした時は、有名な観光地とは違うものがあり、楽しい思い出として強く残っています。そして今回のホームビジットでは、中国人が「日本の文化や生活の様子を知りたい」と言っていたので、家庭にお招きして、日本の家庭・家・生活の状況を少しでも伝えることができたと思っています。たくさんの笑顔から、きっと楽しめてもらえたと思います。
- いろんな外国に行っても英語が結構通じていたので、英語は世界共通語と思っていました。しかし、今回来崎された中国人の方には英語があまり通じなかったので、英語だけではないコミュニケーションの取り方を再認識させられました。

苦労した点

- 今回来崎された中国人の方は、英語があまり話せなかったので、通訳の方がいて下さり大変助かりました。特に我が家に来られた雷さんはとてもいい人で、おかげでとても楽しい時間をもつことができました。

加えるとよいと思われる活動

- ホームビジットの時間が短すぎたので、次回からは 1 時間ほど長く時間を取って欲しいです。

プログラム改善に向けた助言

- 各教科で指導をするときに教師がその教科に興味がなければ、生徒に学ぶ楽しさは教えられません。同じく、国際交流を考えさせるなら、生徒達に教えていくのなら、まず、教職員自らが国際交流に興味をもたなければ生徒には伝わっていかないと思います。だからこそ、今回のような取組みが、是非多くの教職員に広がっていってほしいと願っています。

D グループ（東京近郊）
●公文国際学園
教頭　米山 宏

プログラムの全体的な印象

- 滞在が短時間であったので、満足のゆく学校紹介ができなかったのが心残りです。訪問初日だったので、皆さん緊張されていたのか、当初笑顔がなかったことが少し気になりました。その後、地理の授業で生徒たちとの交流場面になると皆さん笑顔で話されてくれましたので安心しました。その後の話でも地理での交流が評価を得ていたようで、良かったと思っております。

プログラム成果

- 学校にとって異国の先生方を集団で迎えたということで経験値が上がったことと、特に地理の生徒にとっては漢字を交えての交流だったため、中国の人たちが身近な存在に感じられたのではないでしょうか。

苦労した点

- 特にありません。強いて挙げるならば、時間が不足して、最初の会議室での学校紹介の内容を絞り込まなければならなかったことです。

加えるとよいと思われる活動

- 単なる訪問ではなくて、もう少し教員同士が時間をかけて語り合える場面があっても良いかもしれません。

D グループ（和歌山県）
●和歌山県立星林高等学校
教諭　鈴木　裕子

プログラムの全体的な印象

- 中国の先生方の積極的な姿勢が非常に印象的でした。

プログラム成果

- 互いの実情はメディアを通してではなかなか分からないので、直接交流し状況を知ることができたことが何よりの成果でした。

苦労した点

- 授業を見学した後で意見交換ができればよかったのですが、時間割を変更できなかったことが残念です。また、ホストファミリーを探すのが大変でした。

加えるとよいと思われる活動

- 言語の問題もあり、大変難しいと思いますが、相互理解のためのワークショップをしてみるのも面白いかと思いました。

プログラム改善に向けた助言

- 参加者が多くなればなるほどプログラムに関わる人も増え、交流に励みがつきますので、当初の参加人数より参加者が減ったことは残念ですが、受入れ側としては、取り組みにおけるグループ人数は、今回ぐらいの規模の方が対応しやすいと思いました。

D グループ（和歌山県）
●和歌山県立橋本高等学校
教諭　西浦　博之

プログラムの全体的な印象

- 中国の教員の方々の教育に対する情熱が伝わった。
- 学校概要説明では、本校生徒会が担当し、「通訳を通しての会話であったので、伝えたいことが十分であるかは分からない。しかし、笑顔で答えてくれたので伝わっていたのかなあと感じたが、言葉の壁がなくなれば、より交流が深まると感じ、外国語の勉強に積極的に取り組む気持ちがわいた。」との生徒の感想であった。
- 昼食を生徒ホールでとっていただき、食事をしながらの雑談は楽しいひと時であった。

プログラム成果

- 中国の教員の方々と直接交流することにより、異文化理解・相互理解の重要性に気付き、改めて、自校や自身の取り組みに対して、客観的に気付くことがあった。特に、直接中国語での漢文の授業をしていただいたこともあって、生徒たちは外国人を身近に感じ、世界に近づくきっかけを与えていただいた。

加えるとよいと思われる活動

- 中国側の教育事情の説明があれば、相互交流が進む気がした。スケジュールに時間的な余裕があれば、更に交流が深められると感じた。

プログラム改善に向けた助言

- 時間的な余裕があると、更に交流が深められると思いました。

D グループ（和歌山県）
●和歌山県立きのかわ支援学校
教頭　栗山　雅行

プログラムの全体的な印象

- 歓迎セレモニーの時、中国教職員の皆様方から歌のプレゼントがあり、綺麗な歌声で、中国の民謡の中でも特に広く流布し愛唱されている「ジャスミンの花」を聞かせていただいたこと、２曲目の日本の歌、千昌夫の「北国の春」は驚きでした。中国教職員が本校生徒会長の中国語での挨拶を理解してくれたことも嬉しかったです。

プログラム成果

- 互いの教育、特別支援教育について交流もでき、とても有意義な時間でした。

付録

1. 実施要項
2. プログラム日程
3. 参加者リスト
4. 関係機関リスト
5. 文部科学省講義資料
6. プログラム写真
7. 過去のプログラム実績

◆付録 1．実施要項

国際連合大学 2013-2014 年国際教育交流事業
中国教職員招へいプログラム

（2013 年 10 月 20 日－28 日：東京都、大阪府、熊本県、岡山県、長崎県、和歌山県）

実　施　要　項

1．背　景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、国際連合大学の委託を受け、我が国と中国の教職員間の交流を深め、両国民の相互理解と友好の促進に資するため、国際教育交流事業として 2002 年より中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施しております。

また、2003 年からは同プログラムと対をなすものとして、日本の初等中等教育教職員が中国を訪問するプログラムを実施しております。

今回の招へいプログラムも、文部科学省、中国教育部、および各県・市教育委員会の協力のもと、2013 年 10 月 20 日（日）から 10 月 28 日（月）までの 9 日間にわたり、中国から初等中等教育教職員約 60 名を本邦に招へいします。

2．目　的

（1）　日本の教育制度および地域の学校教育の現状を紹介すること
（2）　学校等での意見交換を通じて、日中の教育の質を高めること
（3）　日中教職員間のネットワーク構築・強化に寄与すること
（4）　日本の文化全般に対する理解を深めること
（5）　日中両国の相互理解と友好を促進すること

3．日　程

本プログラムは東京、日本各地の受入れ自治体および大阪に於いて、下記の日程で実施される予定です。

日付	日程	訪問先	活動
10 月 20 日（日）	第 1 日	東京	日本到着 オリエンテーション
10 月 21 日（月） 10 月 22 日（火）	第 2－3 日	東京～指定自治体 受入れ自治体へ移動	開会式、文部科学省講義、歓迎交流会 学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流）
10 月 23 日（水）－26 日（土）	第 4－7 日	4 グループにわかれ、各グループが指定の自治体を訪問 受入れ自治体から大阪へ移動	教育長表敬・訪問地教育事情概要説明、 学校訪問（授業見学、教員、児童生徒との交流） 教育文化施設視察 ホームビジット グループ別情報共有会
10 月 27 日（日）	第 8 日	大阪	報告会・閉会式
10 月 28 日（月）	第 9 日		日本出発

＊ 第 4～7 日の間、参加者は 4 グループに分かれ、指定された自治体を訪問する。

＊ 4 グループは各 15 名程度とし、以下のグループ分けとする。
　Ａグループ（おもに小学校教職員）：熊本県荒尾市
　Ｂグループ（おもに小学校教職員）：岡山県総社市
　Ｃグループ（おもに中学校教職員）：長崎県長崎市
　Ｄグループ（おもに高等学校教職員）：和歌山県

＊ 各グループの代表者は、各県・市での活動について第 8 日に大阪での報告会で報告する。

４．参加者数

約 60 名

５．参加資格

（１）中華人民共和国の国民であること。
（２）所属する学校等からの推薦を受けた、初等中等教育の教職員であること。（教育行政官及び教育専門家を含む）
（３）日本への関心が高く、日本の教職員との、主に教育分野における交流に高い関心を持つもの。
（４）中国語（普通話）での会話が可能であること。
（５）プログラムの全日程に参加が可能であること。

６．評価と報告

（１）各参加者は ACCU の用意する評価票に記入する。
（２）各グループの代表者は、報告会において発表を行う。

７．渡航費等

ACCU は下記の経費を負担する。

（１） 往復航空運賃
北京と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。
（２） 宿泊と食事
プログラム期間中のシングルルーム（朝食含）、およびプログラム期間中の食事。食事が提供されない場合については食費の規定額。
（３） 日本国内の移動旅費
プログラム期間中の、自由行動時間以外の国内移動旅費。

※上記以外の経費については参加者が負担することとする。

８．海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起こりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

９．通訳

公式プログラム期間中は日本語と中国語（普通話）間の逐次通訳が行われる。

１０．申請・推薦手続

中国教育部は、参加者を選定し、プログラム開始約 1 月半前（8 月 31 日）までに参加者データシートを揃えて、ACCU へ推薦することとする。

１１．このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)　人物交流部
〒162-8484　東京都新宿区袋町 6 番地　日本出版会館
Tel: 03-3269-4498, 4435　　Fax: 03-3269-4510
E-mail: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆付録 2. プログラム日程

（1）全体プログラム（東京）

第 1 日（日本到着日）		**10 月 20 日（日）**
北京 東京	09:25 13:55 15:00 16:30 17:00-18:00 18:00-19:00	北京空港発（CA925 便） 成田国際空港着 移動（バス） ホテルメトロポリタンエドモント着（チェックイン） オリエンテーション（ホテル 3 階「春琴」） 夕食（ホテル 3 階「千鳥」）
		宿泊先：ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装：ビジネスカジュアル
第 2 日		**10 月 21 日（月）**
東京	09:00-09:45 10:00-12:00 12:30-14:30 14:45-20:00	開会式（ホテル 1 階「クリスタルホール」） 講義　（ホテル 1 階「クリスタルホール」） 「日本の初等中等教育制度について （Primary and Secondary Education in Japan）」 文部科学省 歓迎交流会（ホテル 2 階「万里」） 東京都内視察、中華人民共和国駐日本在日本中国大使館教育処主催懇談会
		宿泊先：ホテルメトロポリタンエドモント、明日の服装：ビジネスカジュアル
第 3 日		**10 月 22 日（火）**
＜A グループ＞ 東京 荒尾市	08:40 09:00-11:30 15:30 17:15 19:00	ホテル発（チェックアウト） 東京学芸大学附属竹早小学校訪問 昼食 羽田空港発（JL321 便） 福岡空港着、移動（バス） ホテル着（チェックイン）、夕食（各自）
		宿泊先：オームタガーデンホテル、明日の服装：ビジネス
＜B グループ＞ 東京 総社市	08:15 09:30-14:30 17:05 18:20 19:00	ホテル発（チェックアウト） 稲城市立稲城第二小学校訪問（給食交流） 羽田空港発（JL1687 便） 岡山空港着、移動（バス） ホテル着（チェックイン）、夕食（各自）
		宿泊先：コートホテル倉敷、明日の服装：ビジネス
＜C グループ＞ 東京 長崎市	 10:00-14:30 17:10 19:00	ホテル発（チェックアウト） 聖徳学園中学・高等学校訪問（昼食時交流） 羽田空港発（JL1849 便） 長崎空港着、移動（バス） 夕食 ホテル着（チェックイン）
		宿泊先：リッチモンドホテル長崎思案橋、明日の服装：ビジネス
＜D グループ＞ 東京 和歌山県	07:40 09:00-13:00 15:10 16:25 18:00	ホテル発（チェックアウト） 公文国際学園中等部・高等部訪問（学食体験） 羽田空港発（SFJ25 便） 関西空港着、移動（バス） ホテル着（チェックイン）、夕食（各自）
		宿泊先：ホテルグランヴィア和歌山、明日の服装：ビジネス

◆付録 2. プログラム日程

(2)グループプログラム

【グループA:熊本県荒尾市 】(主に小学校教職員)

第 4 日		**10 月 23 日(水)**
大牟田	08:50	ホテル発
荒尾	09:30-11:30	市長・教育長表敬訪問、オリエンテーション(於:荒尾市役所 3 階)
	11:40-12:30	昼食
	12:40-14:40	宮崎兄弟生家見学
	15:00-16:00	松永日本刀剣鍛錬所見学
	16:30	ホテル着
	17:20	ホテル発
	18:00-20:00	歓迎夕食会(於:ホテルブランカ)
	20:30	ホテル着
		宿泊先:オームタガーデンホテル、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 5 日		**10 月 24 日(木)**
大牟田	08:50	ホテル発
荒尾	09:30-13:30	荒尾市立八幡小学校訪問(給食交流)
	14:00-17:00	荒尾市立荒尾海陽中学校訪問
大牟田	17:30	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:オームタガーデンホテル、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 6 日		**10 月 25 日(金)**
大牟田	08:50	ホテル発
荒尾	09:30-12:00	熊本県立荒尾支援学校訪問
	12:40-13:40	昼食
	14:20-16:30	熊本城見学
大牟田	17:30	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:オームタガーデンホテル、明日の服装:カジュアル
第 7 日		**10 月 26 日(土)**
大牟田	07:50	ホテル発(チェックアウト)
		※ホームビジット用の荷物はスーツケースに入れず、手荷物に分けて用意すること
荒尾	08:30-09:30	情報共有会(於:荒尾市役所 3 階会議室)
	09:30-10:00	ホームビジット対面式(於:荒尾市役所 3 階大会議室)
	10:00-12:30	ホームビジット
	13:00	移動(バス)
福岡	15:35	福岡空港発(JAL2056 便)
	16:45	伊丹空港着、移動(バス)
大阪	18:00	ホテル着(チェックイン)、夕食(各自)
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:ビジネスカジュアル

◆付録 2. プログラム日程

(2)グループプログラム

【グループ B:岡山県総社市 】(主に小学校教職員)

第 4 日		**10 月 23 日(水)**
総社	09:00	ホテル発
	09:30-12:00	市長・教育次長表敬訪問、オリエンテーション(於:総社市図書館 3 階展示ホール)
	12:00-13:00	昼食
	13:20-16:50	総社市立総社小学校訪問
倉敷	17:30	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:コートホテル倉敷、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 5 日		**10 月 24 日(木)**
総社	09:00	ホテル発
	09:45-13:40	総社市立総社西中学校訪問(給食交流)
	13:50-16:45	総社市立総社東中学校訪問
倉敷	17:30	ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:コートホテル倉敷、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 6 日		**10 月 25 日(金)**
総社	09:00	ホテル発
	09:30-12:15	総社市立常盤小学校訪問
	12:30-13:15	昼食
	13:30-15:00	宝福寺見学
	15:30-16:15	国分寺見学
	16:30-17:00	きびじつるの里見学
	17:00-17:45	休憩(於:サンロード吉備路)
	18:00-20:00	歓迎夕食会(於:サンロード吉備路)
倉敷	20:30	ホテル着
		宿泊先:コートホテル倉敷、明日の服装:カジュアル
第 7 日		**10 月 26 日(土)**
	09:00	ホテル発(チェックアウト)
総社		※ホームビジット用の荷物はスーツケースに入れず、手荷物に分けて用意すること
	09:30-10:30	情報共有会(於:総社市役所 3 階大会議室)
	10:45-11:00	ホームビジット対面式(於:総社市役所 3 階大会議室)
	11:00-14:30	ホームビジット
大阪	14:45	大阪へ移動(バス)
	18:00	ホテル着(チェックイン)、夕食(各自)
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:ビジネスカジュアル

◆付録 2. プログラム日程

(2)グループプログラム

【グループ C:長崎県長崎市 】(主に中学校教職員)

第 4 日		**10 月 23 日(水)**
長崎	09:00 09:20-09:40 10:15-11:30 13:30-16:00 18:30-20:30	ホテル発 教育長表敬訪問 (於:市役所本館) オリエンテーション(於:市役所本教育委員会議室) 昼食 平和施設見学 (平和公園・原爆落下中心地・原爆資料館等・追悼平和祈念館) 歓迎夕食会 (於:セントヒル長崎) ホテル着
		宿泊先:リッチモンドホテル長崎思案橋、明日の服装:ビジネス
第 5 日		**10 月 24 日(木)**
長崎	08:20 09:00-11:30 12:15-16:35	ホテル発 長崎市立長崎商業高等学校訪問 長崎市立大浦小学校訪問(給食交流) グラバー邸・大浦天主堂見学 ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:リッチモンドホテル長崎思案橋、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 6 日		**10 月 25 日(金)**
長崎	08:30 09:00-11:40 12:30-17:30 17:50	ホテル発 長崎市立朝日小学校訪問 長崎市立片淵中学校訪問(給食交流) ホテル着、夕食(各自)
		宿泊先:リッチモンドホテル長崎思案橋、明日の服装:ビジネスカジュアル
第 7 日		**10 月 26 日(土)**
長崎	08:50 09:00-10:20 10:30 11:00-14:00 14:10 16:10 17:20 18:40	ホテル発 (チェックアウト) ※ホームビジット用の荷物はスーツケースに入れず、手荷物に分けて用意する こと 情報共有会 (於:長崎市民会館) ホームビジット対面式 (於:長崎市民会館) ホームビジット 移動(バス) 長崎空港発 (JL2374 便) 伊丹空港着、移動(バス) ホテル着(チェックイン)、夕食(各自)
大阪		
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:ビジネスカジュアル

◆付録 2. プログラム日程

(2)グループプログラム

【グループ D:和歌山県 】(主に高等学校教職員)

第 4 日		**10 月 23 日(水)**
和歌山	09:00	ホテル発
	09:30-10:30	教育長表敬訪問(学校教育局長)、オリエンテーション(市の概要、教育事情概要)
	11:00-16:00	和歌山県立星林高等学校訪問(学食体験)
	16:30	ホテル着
	18:30-20:30	歓迎夕食会(於:ホテルグランヴィア和歌山 6 階「シェグラン」)
		宿泊先:ホテルグランヴィア和歌山、明日の服装:カジュアル、歩きやすい靴 明日はホテルが変わるため、1 泊分の荷物を用意すること
第 5 日		**10 月 24 日(木)**
和歌山	08:30	ホテル発(チェックアウト)、高野山へ移動
高野山	10:00-17:00	壇上伽藍、霊宝館、金剛峯寺、奥之院視察(途中昼食含む)
	18:00	ホテル着(チェックイン)、夕食(各自)
五條		宿泊先:リバーサイドホテル、明日の服装:カジュアル、歩きやすい靴
第 6 日		**10 月 25 日(金)**
五條	08:15	ホテル発(チェックアウト)
橋本	09:00-13:00	和歌山県立橋本高等学校訪問(学食体験)
	13:15-17:00	和歌山県立きのかわ支援学校訪問
和歌山	18:30	ホテル着(チェックイン)、夕食(各自)
		宿泊先:ホテルグランヴィア和歌山、明日の服装:カジュアル
第 7 日		**10 月 26 日(土)**
和歌山	08:20	ホテル発 (チェックアウト) ※ホームビジット用の荷物はスーツケースに入れず、手荷物に分けて用意する こと
	08:30-09:30	情報共有会(於:ホテルグランヴィア和歌山 6 階「シェグラン」)
	10:00	ホームビジット対面式(於:ホテルグランヴィア和歌山ロビー)
	10:00-14:00	ホームビジット
	15:00-16:00	資源リサイクルセンター(株式会社松田商店)見学
	16:10	大阪へ移動(バス)
大阪	17:30	ホテル着(チェックイン)、夕食(各自)
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:ビジネスカジュアル

◆付録 2. プログラム日程

(3)全体プログラム(大阪)

第 8 日		10 月 27 日(日)
大阪	09:00-11:00 11:00-12:00	報告会 (リーガロイヤル NCB「松の間」) 閉会式 (リーガロイヤル NCB「松の間」) 送別昼食会 夕食(各自)
		宿泊先:リーガロイヤルホテル大阪、明日の服装:カジュアル
第 9 日		**10 月 28 日(月)**
大阪	06:30	ホテル発(チェックアウト)、移動(バス)
	07:30	関西国際空港着
	09:30	関西国際空港発(CA162 便)
北京	11:50	北京空港着

◆付録3.　参加者リスト

(1) Aグループ：熊本県荒尾市

◎総団長：C-1 周卓莹(ZHOU Zhuoying)
○秘書長：C-2 馬力 (MA Li)

★グループ長
☆副グループ長

No.	姓名			性別	所在単位 / 所属機関		职务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
★ A-1	彭　玮	彭　瑋	PENG Wei	女	兰州市第三十五中学	蘭州市第三十五中学校・高校	校长	校長
☆ A-2	龚拥军	龔擁軍	GONG Yongjun	男	长沙市实验小学	長沙市実験小学校	校长	校長
A-3	刘晓文	劉暁文	LIU Xiaowen	女	教育部国际司	教育部国際司	项目官员	プロジェクト委員
A-4	蔡　青	蔡　青	CAI Qing	女	长沙市麓谷中心小学	長沙市麓谷中心小学校	校长	校長
A-5	陈银芝	陳銀芝	CHEN Yinzhi	女	长沙市开福区清水塘实验小学	長沙市開福区清水塘実験小学校	校长	校長
A-6	吴虎强	呉虎強	WU Huqiang	男	长沙市岳麓区第一小学	長沙市岳麓区第一小学校	校长	校長
A-7	邹玲静	鄒玲静	ZOU Lingjing	女	长沙麓山国际实验学校	長沙麓山国際実験学校	教研组长	教研組長
A-8	杨永霞	楊永霞	YANG Yongxia	女	兰州市城关区辅读学校	蘭州市城関区輔読学校	校长	校長
A-9	何宏兰	何宏蘭	HE Honglan	女	兰州市城关区辅读学校	蘭州市城関区輔読学校	教师	教師
A-10	刘明扬	劉明揚	LIU Mingyang	男	甘肃省兰州实验小学	甘粛省蘭州実験小学校	校长	校長
A-11	陈腊英	陳臘英	CHEN Laying	女	高安市大城镇中心小学	高安市大城鎮中心小学校	语文教师	国語教師
~~A-12~~								
A-13	吕泓靓	呂泓靚	LV Hongliang	女	遂川县禾源镇中心小学	遂川県禾源鎮中心小学校	语文教师	国語教師
A-14	郑垚婷	鄭垚婷	ZHENG Yaoting	女	南昌市培智学校	南昌市培智学校	语文教师	国語教師
A-15	肖菊莲	肖菊蓮	XIAO Julian	女	新余市特殊教育学校	新余市特殊教育学校	校长	校長

ACCU随行員：　康　武司　　通訳：　伊藤　経子、渋谷　千春

(2) Bグループ：岡山県総社市

★グループ長
☆副グループ長

No.	姓名			性別	所在単位 / 所属機関		职务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
★ B-1	张忠苍	張忠蒼	ZHANG Zhongcang	男	兰州市第五中学	蘭州市第五中学校・高校	校长	校長
☆ B-2	张　毅	張　毅	ZHANG Yi	男	甘肃省教育厅	甘粛省教育庁	科员	課員
B-3	徐世赟	徐世贇	XU Shiyun	男	兰州市东郊学校	蘭州市東郊学校	教师	教師
B-4	田兰莉	田蘭莉	TIAN Lanli	女	兰州市七里河区安西路小学	蘭州市七里河区安西路小学校	校长	校長
B-5	李　瑛	李　瑛	LI Ying	女	兰州市七里河区下西园小学	蘭州市七里河区下西園小学校	教师	教師
B-6	滕铭娟	滕銘娟	TENG Mingjuan	女	兰州市西固区玉门街小学	蘭州市西固区玉門街小学校	校长	校長
B-7	方振国	方振国	FANG Zhenguo	男	甘肃省兰州实验小学	甘粛省蘭州実験小学校	副校长	副校長
B-8	余洪瑶	余洪瑶	YU Hongyao	女	南昌师范附属实验小学	南昌師範附属実験小学校	数学教师	数学教師
B-9	雷　莉	雷　莉	LEI Li	女	南昌市松柏小学	南昌市松柏小学校	语文教师	国語教師
B-10	郭庆芳	郭慶芳	GUO Qingfang	女	南昌县莲塘第二小学	南昌県蓮塘第二小学校	语文教师	国語教師
B-11	管兴明	管興明	GUAN Xingming	男	西北师范大学第二附属中学	西北師範大学第二附属中学校・高校	校长	校長
B-12	魏永胜	魏永勝	WEI Yongsheng	男	榆中县恩玲中学	榆中県恩玲中学校・高校	校长	校長
B-13	谢立亚	謝立亜	XIE Liya	男	兰州市第三十三中学	蘭州市第三十三中学校・高校	教师	教師
B-14	田泽兴	田澤興	TIAN Zexing	男	西北师范大学附属中学	西北師範大学附属中学校・高校	教师	教師
B-15	魏子钧	魏子鈞	WEI Zijun	男	兰州市第十四中学	蘭州市第十四中学校・高校	副校长	副校長

ACCU随行員：　杉原　由美子　　通訳：　名田　裕美子、田中　美佐子

(3)　Ｃグループ：長崎県長崎市

◎総団長：C-1 周卓瑩(ZHOU Zhuoying)
○秘書長：C-2 馬力 (MA Li)

★グループ長
☆副グループ長

No.	姓名			性別	所在単位 / 所属機関		職务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
◎ C-1	周卓瑩	周卓瑩	ZHOU Zhuoying	女	长沙市教育局	長沙市教育局	副处长	副処長
○ C-2	马力	馬力	MA Li	男	教育部国际司	教育部国際司	项目官员	プロジェクト委員
★ C-3	黄迎浪	黄迎浪	HUANG Yinglang	女	长沙市天心区湘府英才小学	長沙市天心区湘府英才小学校	校长	校長
☆ C-4	刘德华	劉德華	LIU Dehua	男	长沙市长郡双语实验中学	長沙市長郡双語実験中学校・高校	副校长	副校長
C-5	焦　英	焦　英	JIAO Ying	女	长沙市芙蓉区育英第二小学	長沙市芙蓉区育英第二小学校	教师	教師
C-6	邹　硕	鄒　碩	ZOU Shuo	女	长沙市雨花区枫树山大桥小学	長沙市雨花区楓樹山大橋小学校	校长	校長
C-7	彭冬梅	彭冬梅	PENG Dongmei	女	长沙市实验中学	長沙市実験中学校・高校	年级组长	学年組長
C-8	刘克甫	劉克甫	LIU Kefu	男	长沙市长郡双语实验中学	長沙市長郡双語実験中学校・高校	教师	教師
C-9	张永赋	張永賦	ZHANG Yongfu	男	长沙市南雅中学	長沙市南雅中学校・高校	教务处副主任	教務処副主任
C-10	吴志勇	呉志勇	WU Zhiyong	男	长沙市南雅中学	長沙市南雅中学校・高校	副校长	副校長
C-11	陈建华	陳建華	CHEN Jianhua	男	南昌市第二十七中学	南昌市第二十七中学校・高校	教务主任	教務主任
C-12	方　波	方　波	FANG Bo	男	南昌市第十七中学	南昌市第十七中学校・高校	数学教师	数学教師
C-13	李仲华	李仲華	LI Zhonghua	男	南昌市第二十八中学	南昌市第二十八中学校・高校	数学教师	数学教師
C-14	胡洁玲	胡潔玲	HU Jieling	女	赣州市第三中学	贛州市第三中学校・高校	政教处主任	政教処主任
C-15	黎　婷	黎　婷	LI Ting	女	九江市十一中学	九江市十一中学校・高校	教研处副主任	教研処副主任

ACCU随行員：　外山　紀子　　通訳：　鹿野　裕実子、松井　美穂

(4)　Ｄグループ：和歌山県

★グループ長
☆副グループ長

No.	姓名			性別	所在単位 / 所属機関		職务 / 職務	
	中文	日文	拼音 / ローマ字表記		中文	日文	中文	日文
★ D-1	汪根林	汪根林	WANG Genlin	男	婺源县天佑中学	婺源県天佑中学校・高校	校长	校長
☆ D-2	熊礼淼	熊礼淼	XIONG Limiao	男	江西省教育厅	江西省教育庁	主任科员	主任課員
D-3	李琼	李瓊	LI Qiong	女	教育部国际司	教育部国際司	项目官员	プロジェクト委員
D-4	李　伟	李　偉	LI Wei	男	长沙市明德中学	長沙市明徳中学校・高校	教务处主任	教務処主任
D-5	曹共平	曹共平	CAO Gongping	男	长沙市周南中学	長沙市周南中学校・高校	教务处主任	教務処主任
D-6	彭　勇	彭　勇	PENG Yong	男	长沙市第六中学	長沙市第六中学校・高校	副校长	副校長
D-7	唐俊杰	唐俊傑	TANG Junjie	男	长沙市特殊教育学校	長沙市特殊教育学校	教师	教師
D-8	韦正强	韋正強	WEI Zhengqiang	男	长沙市特殊教育学校	長沙市特殊教育学校	校长	校長
D-9	巫诚红	巫誠紅	WU Chenghong	女	南昌市实验中学	南昌市実験中学校・高校	艺术处主任	芸術処主任
D-10	陶学明	陶学明	TAO Xueming	男	南昌市第二中学	南昌市第二中学校・高校	教务副主任	教務副主任
D-11	王志军	王志軍	WANG Zhijun	男	南昌市外国语学校	南昌市外国語学校	英语教师	英語教師
D-12	黄晓云	黄暁雲	HUANG Xiaoyun	女	临川第一中学	臨川第一中学校・高校	副校长	副校長
D-13	孙建华	孫建華	SUN Jianhua	女	兰州市第六十三中学	蘭州市第六十三中学校・高校	教师	教師
D-14	杨建军	楊建軍	Yang Jianjun	男	兰州市第九中学	蘭州市第九中学校・高校	教师	教師
D-15	罗泽燕	羅澤燕	LUO Zeyan	女	兰州女子中等专业学校	蘭州女子中等専業学校	副校长	副校長

ACCU随行員：　米島　百合子　　通訳：　石川　友子、八木　環

◆付録 4. 関係機関リスト

(1) 全体プログラム

国際連合大学(UNU)
〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70
TEL:03-5467-1212 、URL: http://jp.unu.edu/

文部科学省(MEXT)
大臣官房国際課
〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3-2-2
TEL: 03-5253-4111、URL: http://www.mext.go.jp

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 日本出版会館
TEL:03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510 Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp
URL:http://www.accu.or.jp

中華人民共和国教育部
国際協力交流局アジア・アフリカ課
〒100-816 中国北京市西単大木仓胡同 35 号、TEL: +86-10-6609-6650

中華人民共和国駐日本国大使館
〒106-0046 東京都港区元麻布 3-4-33
TEL:03-3403-3388、URL: http://www.china-embassy.or.jp

中華人民共和国駐日本大国使館教育処
〒135-0023 東京都江東区平野 2-2-9
TEL:03-3643-0305、URL: http://www.china-embassy.or.jp/jpn/

中華人民共和国駐大阪総領事館
〒550-0004 大阪府大阪市西区靭本町 3-9-2
TEL: 06-6445-9481、URL: http:// osaka.china-consulate.org

在中華人民共和国日本国大使館
〒100600 中国北京市亮馬橋東街 1 号
TEL: +86-10-8531-9800、URL: http://www.cn.emb-japan.go.jp/index_j.htm

外務省
大臣官房外務報道官・広報文化組織国際文化協力室
〒100-8919 東京都千代田区霞ヶ関 2-2-1
TEL: 03-3580-3311、URL: http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html

(2)グループ・プログラム（受入自治体）

A. 熊本県荒尾市教育委員会
教育長 丸山 秀人、教育振興課 指導主事 荒岡格生
〒864-8686 熊本県荒尾市宮内出目 390
TEL: 0968-63-1111（代表）、 URL: http://www.city.arao.lg.jp/

B. 岡山県総社市教育委員会
教育長 山中 榮輔、学校教育課 主幹 森木 浩介
〒719-1192 岡山県総社市中央 1-1-1
TEL: 0866-92-8358、URL: http://www.city.soja.okayama.jp/

C. 長崎県長崎市教育委員会
教育長 馬場 豊子、学校教育課 指導主事 久松千樹
〒850-8685 長崎県長崎市桜町 2-22
TEL: 095-829-1191、URL: http://www.city.nagasaki.lg.jp/kosodate/520000/index.html

D. 和歌山県教育委員会
教育長 西下 博通、学校指導課 指導主事 上出 惠
〒640-8585 和歌山市小松原通一丁目一番地
TEL: 073-441-3640（代表）、URL: http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500100/

◆付録５．文部科学省講義資料

日本の初等中等教育

文部科学省初等中等教育局
栗山　和大

文部科学省
MEXT
MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

講演の構成

Ⅰ．日本の基本的な初等中等教育制度

Ⅱ．日本の現状認識と教育政策の方向性

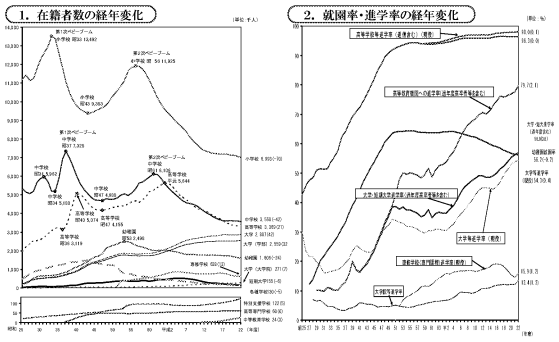
Ⅰ．日本の基本的な初等中等教育制度

学校数、在籍者数、本務教員数

学校種	学校数（校数）	在籍者数（人数）	本務教員数（人数）
幼 稚 園	13, 171	1, 604, 217	110,840
小 学 校	21, 460	6, 764, 638	418, 685
中 学 校	10, 699	3, 552, 684	253, 739
高等学校	5, 022	3, 355, 509	237, 221
中等教育学校	49	28, 644	2, 192
特別支援学校	1,059	129, 994	76, 382
合　計	**51, 465**	**15, 435, 686**	**1, 099, 059**

（出典：文部科学省「平成24年度学校基本調査（速報値）」より）

在籍者数、就園率・就学率の経年変化



義務教育制度の概要

憲　法

第26条　すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負う。義務教育は、これを無償とする。

教育基本法

第5条　国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。

2　義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。

3　国及び地方公共団体は、義務教育の機会を保障し、その水準を確保するため、適切な役割分担及び相互の協力の下、その実施に責任を負う。

4　国又は地方公共団体の設置する学校における義務教育については、授業料を徴収しない。

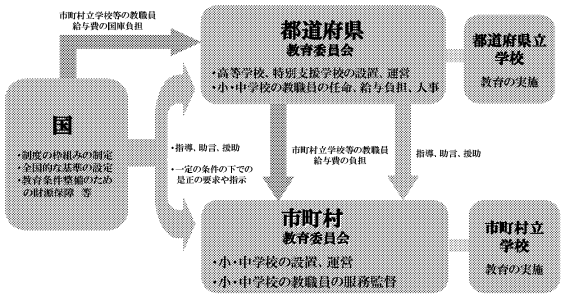
学校教育法

［就学義務］

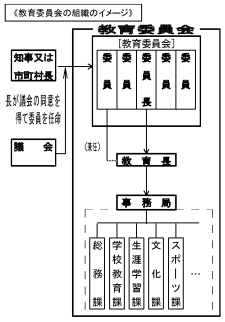
第17条　保護者は、子の満六歳に達した日の翌日以後における最初の学年の初めから、満十二歳に達した日の属する学年の終わりまで、これを小学校又は特別支援学校の小学部に就学させる義務を負う。（後段略）

②　保護者は、子が小学校又は特別支援学校の小学部の課程を修了した日の翌日以後における最初の学年の初めから、満十五歳に達した日の属する学年の終わりまで、これを中学校、中等教育学校の前期課程又は特別支援学校の中学部に就学させる義務を負う。

教育行政制度の概要（国・都道府県・市町村の役割）



教育委員会制度の概要



1. 教育委員会制度の仕組み

- ○ 教育委員会は、首長から独立した行政委員会として全ての都道府県及び市町村等に設置。
- ○ 教育委員会は、教育行政における重要事項や基本方針を決定し、それに基づいて教育長が具体の事務を執行。
- ○ 教育委員は、非常勤で、原則5人。任期は4年で、再任可
- ○ 教育長は、常勤で、教育委員のうちから教育委員会が任命。

2. 教育委員会制度の意義

① 政治的中立性の確保
教育は、その内容が中立公正であることが極めて重要。個人的な価値判断や特定の党派的影響力から中立性を確保することが必要。

② 継続性・安定性の確保
特に義務教育について、学習期間を通じて一貫した方針の下、安定的に行われることが必要。

③ 地域住民の意向の反映
教育は、地域住民にとって関心の高い行政分野であり、専門家のみが担うのではなく、広く地域住民の参加を踏まえて行われることが必要。

教育基本法（平成18年12月成立）の概要①

第1章　教育の目的・理念

（1）教育の目的・理念を明示

①教育の目的として「人格の完成」「国家・社会の形成者として心身ともに健康な国民の育成」を規定

②この教育の目的を実現するために今日重要と考えられる事柄を「教育の目標」として規定

＜教育の目標の例＞
- ・幅広い知識と教養、豊かな情操と道徳心、健やかな身体
- ・能力の伸長、自主・自律の精神、職業との関連を重視
- ・正義と責任、自他の敬愛と協力、男女の平等、公共の精神
- ・生命や自然の尊重、環境の保全
- ・伝統と文化の尊重、我が国と郷土を愛し、他国を尊重、国際社会の平和と発展に寄与

⑵「生涯学習の理念」「教育の機会均等」

教育基本法の概要②

第2章　教育の実施に関する基本

教育を実施する際に基本となる事項として、これまでの教育基本法にも定められていた、「義務教育」、「学校教育」、「教員」、「社会教育」、「政治教育」、「宗教教育」に関する規定を見直すとともに、新たに「大学」、「私立学校」、「家庭教育」、「幼児期の教育」、「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」について規定

第3章　教育行政

教育行政における国と地方公共団体の役割分担、教育振興基本計画の策定等について規定

第4章　法令の制定

この法律の諸条項を実施するための必要な法令の制定について規定

学習指導要領①

○ 教育基本法の改正等を踏まえ、平成20年に、幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領を、平成21年に、高等学校学習指導要領、特別支援学校学習指導要領を改訂。

○ 新学習指導要領は、小学校では平成23年度、中学校では平成24年度から全面実施、高校では平成25年度入学生から年次進行で実施。

学習指導要領の改訂のポイント

1. 学習指導要領改訂の基本的な考え方

①教育基本法改正等で明確になった教育の理念を踏まえ、「生きる力」を育成

②知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視

③道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成

2. 授業時数の増加（小・中学校）

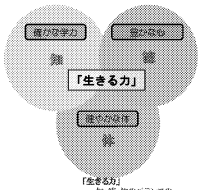
○国語、社会、算数・数学、理科、体育・保健体育、外国語の授業時数を約10%増加

○週当たりのコマ数を小学校低学年で週2コマ、小学校中・高学年、中学校各学年で週1コマ増加

3. 必履修科目、教育課程編成時の配慮事項等（高等学校）

○学習の基盤となる国語、数学、外国語に共通必履修科目を設定するとともに、理科の科目履修の柔軟性を向上

○義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設けることを促進



「生きる力」
―知・徳・体のバランスのとれた力

※特別支援学校については、幼・小・中・高等学校に準ずる改善を図るほか、障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育や必要な支援を充実

学習指導要領②　―教育内容の主な改善事項

《新学習指導要領における教育内容の主な改善事項》

① 言語活動の充実
言語活動は、知的活動（論理や思考）、コミュニケーション、感性・情緒の基盤。子どもたちの思考力・判断力・表現力等を育むため、国語をはじめ各教科等において、知識・技能を活用してレポートの作成や論述を行うなど言語の力を高める学習を実施。

② 算数教育の充実
国際的に通用するカリキュラムにするとともに、新しい科学的知見を取り入れるため、学習内容を充実。算数・数学では、大切な内容を繰り返して学習することや、学習の中で学んだことを実生活で生かすような学習、理科では、観察や実験を充実する。

③ 伝統や文化に関する教育の充実
国際社会で活躍する人材の育成を図るため、我が国や郷土の伝統や文化について理解を深め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実する。

④ 道徳教育の充実
道徳の時間を要として、学校の教育活動全体を通じて子どもたちの道徳性を養う。

⑤ 体験活動の充実
子どもたちの社会性や豊かな人間性を育むため、小学校で自然の中での集団宿泊活動、中学校で職場体験活動などを充実。

⑥ 外国語教育の充実
小学校5、6年生における「外国語活動」の導入、中・高等学校における指導語彙の充実や「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成することにより、小・中・高等学校を通じて外国語教育を充実する。

⑦ 健やかな体の育成
子どもたちが生涯にわたって健康を保持増進するとともに、豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うため、健康で安全な生活を営む実践力を育成し、運動の楽しさや喜びを味わうことができるよう体育・保健体育を充実する。

※ 特別支援学校学習指導要領では、上記に準じた改善のほか、①障害の重度・重複化、多様化への対応、②自立と社会参画に向けた職業教育の充実、③交流及び共同学習の推進等の改善が図られています。

教員養成・免許制度の概要

【免許状主義と開放制の原則】

免許状主義

教員は、教育職員免許法により授与される各相当の免許状を有する者でなければならない。

開放制の原則

わが国の教員養成は、一般大学と教員養成系大学とがそれぞれの特色を発揮しつつ行っている。

【教員養成・採用・研修等の各段階を通じた教員の資質向上】

養成

- 大学における養成が原則
- 教職課程の認定を受けた学科等において、教科に関する科目、教職に関する科目などを修得することにより、採用当初から学級や教科を担任し、教科指導、生徒指導等を実践するために必要な最小限の資質能力を養成

採用

- 都道府県・指定都市教育委員会等において採用選考試験を実施
- 多面的な人物評価の一層の推進
  - ・面接試験・実技試験の重視
  - ・様々な社会体験等の評価

研修

- 都道府県教育委員会等における研修
  - ・初任者研修　・10年経験者研修　等
- 国（教員研修センター）における研修
  - ・各地域において中心的な役割を担う教職員に対する学校運営研修
  - ・喫緊の重要課題研修　等

適切な人事管理

- 指導が不適切な教員に対する人事管理システムの適切な運用
- 教員評価システム　● 優秀教員表彰

免許更新制

- 教員が定期的に最新の知識技能を身につけることで教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることが目的
- 免許状に10年の有効期間を定める

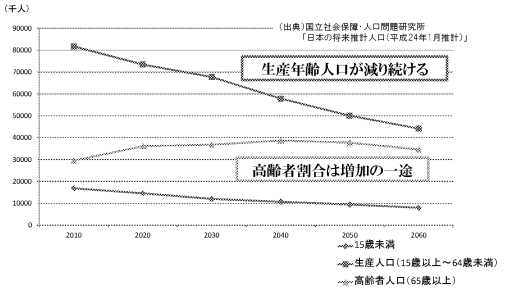
Ⅱ. 日本の現状認識と教育政策の方向性

日本の現状に対する認識

1. 少子化・高齢化の進展
2. 非正規雇用の増加
3. 子供の貧困率の上昇
4. 我が国の国際的な存在感の低下

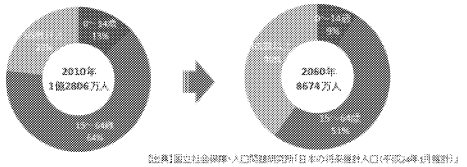
1. 少子化・高齢化の進展

少子化の急激な進行により、生産年齢人口が大きく減少



生産年齢人口と非生産年齢人口の比率の変化

2010年には2.8人で1人を支えているが、2060年には1.3人で1人を支えることになる



（出典）国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」

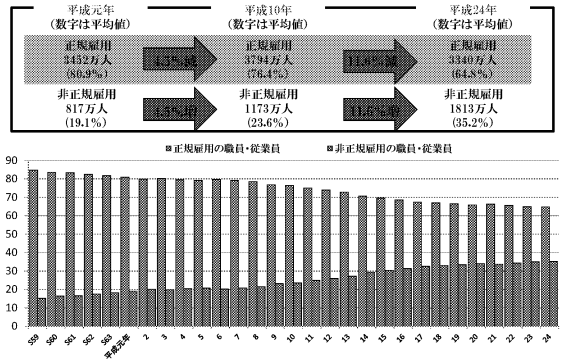
2010年　8173万人 ÷ 2948万人 ≒ 2.8人

15～64歳人口　65歳以上人口

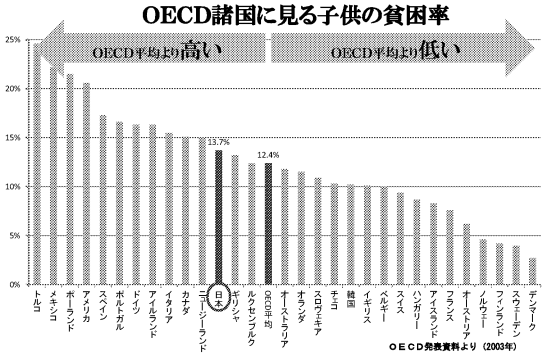
2060年　4418万人 ÷ 3464万人 ≒ 1.3人

31

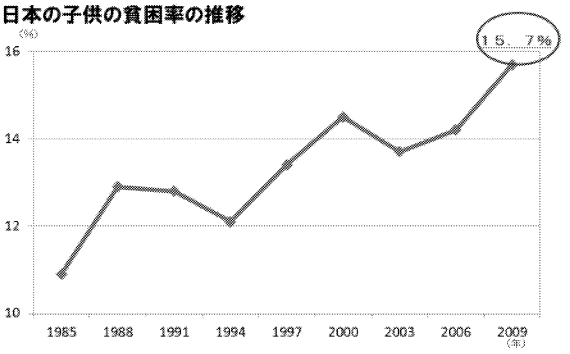
2. 非正規雇用の増加



3. 子供の貧困率の上昇



日本の子供の貧困率の推移



厚生労働省「平成24年 グラフで見る世帯の状況（平成22年国民生活基礎調査の結果から）」
注（1）1994年の数値は、兵庫県を除いたものである。
2）貧困率は、ＯＥＣＤの作成基準に基づいて算出している。

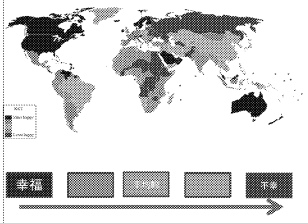
35

4. 我が国の国際的な存在感の低下

アメリカや先進諸国等に比べ、幸福度は低い

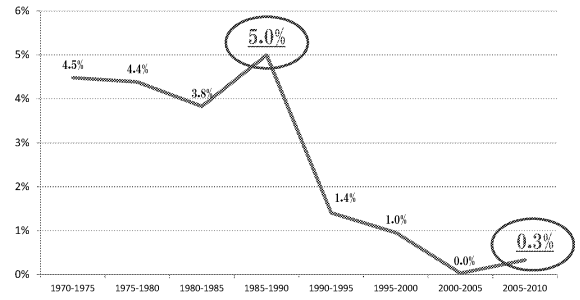
世界の満足度（SWLS）	97ヵ国の幸福度（WVS調査）
1位 デンマーク	1位 デンマーク
2位 スイス	2位 プエルトトルコ
3位 オーストリア	3位コロンビア
23位 アメリカ	**16位 アメリカ**
35位 ドイツ	20位 ベルギー
41位 イギリス	21位 英国
62位 フランス	22位 オーストラリア
82位 中国	
90位 日本	**43位 日本**
167位ロシア	88位ロシア

世界幸福地図



1970～2010年の実質GDP成長率の推移

実質GDP成長率は20年間で5.0%から大きく低下



（出典）内閣府「国民経済計算確報」（1998、2009、2011年度）

新興国が経済成長する一方、日本の存在感が相対的に低下

GDPの伸びと高等教育進学率（1990→2009）

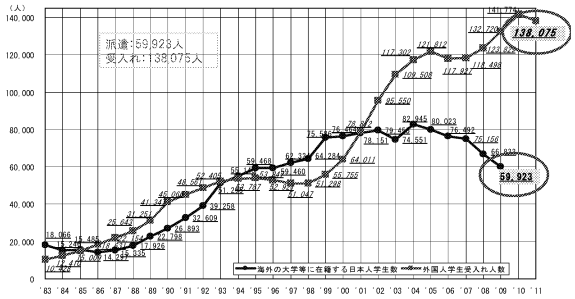
＜GDP伸長＞ ＜進学率＞

- 韓国　3.1倍　37%→71%
- 中国　12.5倍　3%→17%
  （29万人→262万人）
- タイ　3.1倍　16%→46%
- オーストラリア　3.1倍　35%→94%
- 日本　1.6倍　36%→56%（短期大学含む）

（出典）文部科学省『人材のイノベーションによる日本再生に向けて』

日本人の海外留学者数

外国人留学生は頭打ち、日本人学生の内向き志向



「超高齢社会」と「グローバル社会」が
同時に到来

⬇

今こそ「教育再生」が必要

○生産年齢人口の減少にあった人材育成
➡ 個人の付加価値を高める
○海外でチャンスをつかめる人材育成
➡ グローバルマインド・スキルの育成

「教育再生」の方向性

○ 幼児教育から高等教育まで俯瞰した取組と、ポイントを押さえた効果的・効率的な取組の展開

○ 教育内容、教育方法、教育システム、教育環境、教育機関すべてに亘るパッケージの改革

これから求められる力

○ クリエイティブにものを考える力
○ 自立的に考え、活動する力
○ 優しさや思いやりなどの感性

現状認識を踏まえた教育政策

「これから求められる力」を育むための環境づくり

政策1. 大学入試の抜本的な見直し
政策2. グローバル人材育成
政策3. 教育基盤の充実
政策4. 高校教育改革
政策5. いじめ・体罰の根絶

政策1. 大学入試の抜本的見直し	【課　題】 ○ 大学入試が知識偏重の学力検査になっている ○ 少子化が進展し、選抜機能が低下する中で確実な学力把握が必要になっている ○ 高校教育の在り方、大学教育の在り方、大学入学者選抜の在り方について、一者を一体的に捉えた改革が必要 ↓ 【改革の方向性】 ○ 高校教育から一貫した質保証への転換 ○ 大学入試における意欲・能力・適性等の多面的・総合的な評価への転換 ○ 大学入試へのTOEFL等活用の飛躍的拡充 → **高校教育など、初等中等教育全体の質的向上に波及**
政策2. グローバル人材育成	【課　題】 ○ 教育において、到来しつつあるグローバル社会への対応が十分でない ○ 小学校から大学・大学院まで視野に入れたパッケージとしての施策が講じられていない ○ 日本人学生の顕著な内向き志向 ↓ 【改革の方向性】 ○ 以下の施策を互いに関連付けながら展開 ①小・中・高等学校を通じた英語教育の強化 ②国際バカロレア等を活用した人材育成 ③スーパーグローバルハイスクールの創設
小・中・高等学校を通じた英語教育の強化 【ポイント】 ○ 教育課程全体の見直しの中で英語教育を強化 [我が国の伝統や文化などアイデンティティに関わる教育の充実も必要] ○ 小学校英語の中核となる教員の計画的育成・確保 ○ 中学校・高等学校英語科教員の資質能力の向上 ○ ネイティブ・スピーカー等の活用促進	**スーパーグローバルハイスクールの創設** 【ポイント】 ○ 高等学校等において、語学力とともに、幅広い教養、問題解決力等の国際的素養を身に付けたグローバル・リーダーを育成。 ○ [・国内外の大学や企業、国際機関等と連携、 ・外国語を使う機会の飛躍的増加、 ・国内外にわたる課題を発見・解決したり、グローバルなビジネスで活躍したりできる人材の育成 に取り組む高等学校 ○ 平成26年度に全国100校を指定（予定）

政策3. 教育基盤の充実

【課　題】

○ 世界トップレベルの学力・規範意識の育成

【改革の方向性】

○ 教職員等指導体制の整備

○ メリハリのある教員給与

○ 教員の資質向上

○ 学校の組織運営の改善

○ 厳格な人事管理

「教師力・学校力向上7か年戦略」の主なポイント① 平成25年8月30日　文部科学省

教職員等指導体制の整備 ～世界トップレベルの学力・規範意識を育むきめ細かな指導体制を整備～

1．少人数教育の推進　14,700人の定数措置　<7か年の改善総数 33,500人　7か年の自然減等 34,900人>

・少人数学級の推進（36人以上学級の解消）
（※1学級が20人以下になる場合を除く）

・ティームティーチングや習熟度別指導の推進

市町村の裁量で選択的に実施

2．個別の教育課題への対応　18,800人の定数措置

○小学校の理科・英語や道徳の指導体制強化（2,000人）　⇒　各市町村1名程度「リーダー教師」を配置

○いじめ問題への対応（6,000人）　⇒　一定規模（※）以上の学校に生徒指導専任の教員配置（※小学校15学級、中学校15学級）

○特別支援教育の充実（3,500人）　⇒　通級指導に係る各県からの加配要請等に対応

○学校統合の支援（900人）　⇒　学校統合に対して教職員定数の激変緩和措置

◎このほか、退職者等の外部人材の活用も促進

など

「教師力・学校力向上7か年戦略」の主なポイント② 平成25年8月30日　文部科学省

メリハリある教員給与

○管理職手当の改善　⇒　指導的役割を担う校長への支給率を改善　給料の20%相当

○部活動手当等の増額　⇒　4年間で倍増　2,400円／4h ⇒ 4,800円／4h

○休職者等への教職調整額の支給　⇒　休職者等に係る教職調整額の支給の在り方について検討

など

教員の資質向上

⇒ 指導教諭の配置による校内の研修体制の充実を中心とした初任者研修の抜本的な改革

⇒ 各教育委員会による「教師塾」の設置促進

⇒ 社会人経験者の登用を推進

など

学校の組織運営の改善

⇒ 全校での主幹教諭の計画的配置を推進（※一定規模（15学級）以上の学校には加配定数による支援 1,000人）

主任制度の在り方についても検討

など

厳格な人事管理

○病休・復職の繰返しへの対応　⇒　条例等による同一疾病の場合の休職期間通算の規定整備を促進
復職前の勤務訓練の充実、指定医による診断を活用した復職審査の厳格化

○指導力不足教員への対応　⇒　指導に課題がある教員に対する早期指導、支援等の取組を促進

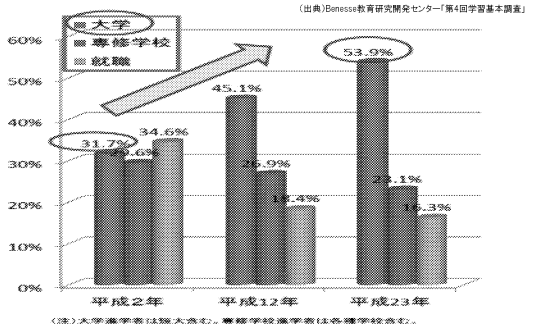
など

政策4. 高校教育改革

高校卒業者の進路の推移

大学進学率は過去20年間で32%から54%へ上昇

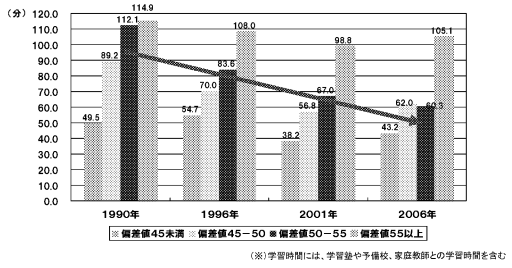
（出典）Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」



（注）大学進学者は浪人含む。専修学校進学者は各種学校含む。

高校生の学校外における平日の学習時間の推移

ボリュームゾーンである中間層の勉強時間が大きく減少している。



（※）学習時間には、学習塾や予備校、家庭教師との学習時間を含む

【調査概要】高校2年生（普通科）4464人を対象に、全国4地域（東京・東北・四国・九州地方の都市部と郡部）で実施。
（出典）Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」

【課　題】

○ 大学進学率は過去20年間で32%から54%へ上昇する一方、高校生の学習時間は大きく低下

○ 少子化を背景として、大学入試によって高校生が勉強するというモデルが現状では崩壊

【改革の方向性】

○ 高校生の学習ニーズや進路等に対応した高校教育の多様化とともに、高校教育の質の確保・向上に向けた取組を推進

○ スーパーグローバルハイスクールやスーパーサイエンスハイスクールにより、優れた才能を徹底して伸ばす仕組みを推進

公立高等学校の授業料不徴収及び高等学校等就学支援金制度の概要

平成22年4月より、公立高校の授業料を無償化し、私立高等学校等に通う生徒に対する就学支援金制度を創設

（平成25年度予算額：3,950億円）

制度概要

○公立の高等学校については授業料を不徴収とし、地方公共団体に対して授業料収入相当額を国費により負担。

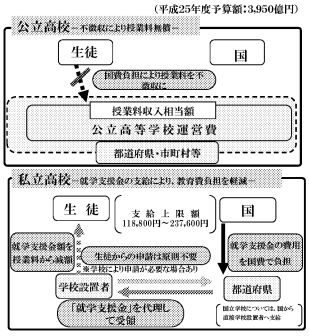
○私立の高等学校生徒については、高等学校等就学支援金として授業料について一定額（年額118,800円）を助成（学校設置者が代理受領）することにより、教育費負担の軽減を図る。

○私立の高等学校に通う低所得世帯の生徒については、所得に応じて、助成金額を1．5～2倍した額を上限として助成する。

年収250万円未満程度※　237,600円（1.5倍）

年収250～350万円未満程度※　178,200円（2倍）

※両親と子ども2人の世帯の場合を想定



高校無償化制度の見直しについて

教育費負担の軽減を図り、実質的な教育の機会均等を実現するため、高校無償化制度を総合的に見直す

見直しの方向性
①低所得者への支援
②公私間格差・自治体間格差の是正
このため、現行制度に所得制限を設けて、高等学校等に係る修学支援の充実を図る

現状の課題	見直しの具体策
無償化前から授業料が全額免除されていた低所得者は恩恵がなかった 低所得者にとって授業料以外の教育費（教科書代など）も大きな負担	低所得者支援のため、公立・私立ともに対象とした奨学のための給付金制度を創設
私学進学者の負担は依然として重く、都道府県によって支援の状況が大きく異なる	公私間格差を縮小し、国による私立に対する支援を拡充
制度導入と同時に行われた特定扶養控除縮減による影響に配慮することが必要	特別支援学校の生徒への就学奨励費の拡充

政策5. いじめ・体罰の根絶

【課　題】

○「いじめ防止対策推進法（平成25年6月成立）」の理念の早期実現

【改革の方向性】

① いじめの問題への対応
・いじめ防止対策推進法

② 体罰禁止の徹底
・懲戒と体罰の区別など

③ 運動部活動における体罰根絶
・運動部活動での指導のガイドライン

④ 道徳の教科化
・教材の抜本的充実、新たな枠組みによる教科化

いじめ防止対策推進法の概要

1．いじめ防止基本方針の策定（国・学校は義務、地方公共団体は努力義務）

2．基本的施策・いじめ防止等に関する措置

○ 学校・設置者は、①道徳教育等の充実、②早期発見のための措置、③相談体制整備、④ネットいじめ対策推進

○ 国・地方公共団体は、①いじめ防止対策に従事する人材の確保、②調査研究の推進、③啓発活動

○ 学校は、いじめ防止対策のための組織を設置

○ 個別のいじめに対して、①いじめの事実確認、②いじめを受けた児童等に対する支援、③いじめを行った児童等に対する指導、④犯罪行為として取り扱われるべきと認めるときの所轄警察署との連携

3．重大事態への対処

○ 学校は、教育委員会を通じて地方公共団体の長に報告

○ 学校・設置者は、①事実関係を明確にするための調査、②児童・保護者への情報提供

○ 地方公共団体の長等による、上記の調査の結果の再調査、再調査を踏まえた必要な措置

◆付録 6．プログラム写真（Aグループ）

グループ長（後列左から 5 番目）、校長（同 6 番目）を囲んで（荒尾市立荒尾海陽中学校）

副グループ長から副校長への記念品贈呈
（東京学芸大附属竹早小学校）

熊本県荒尾市教育委員会表敬訪問（荒尾市）

グループ長（右）と握手を交わす館長(左)（宮崎兄弟資料館）

日本刀の鋳造体験（松永日本刀鍛錬所）

炭鉱節を踊る中国教職員（荒尾市歓迎夕食会）

全校生徒合唱（荒尾市立海陽中学校）

1.2 年生の歓迎の歌（荒尾市立八幡小学校）

校長へ記念品の贈呈（熊本県立荒尾支援学校）

ホームビジット対面式で自己紹介

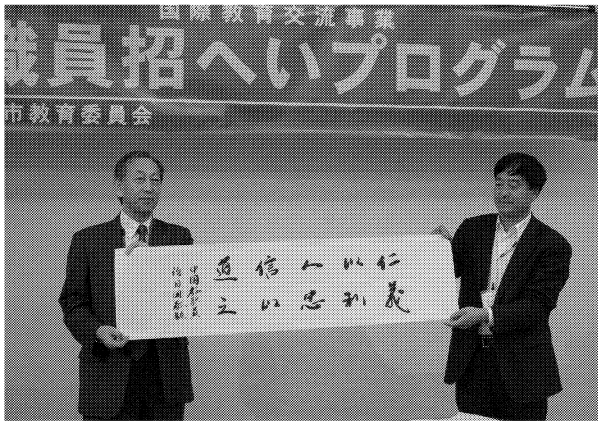
教育機関訪問での気づきを発表（報告会）

◆付録 6．プログラム写真（Ｂグループ）

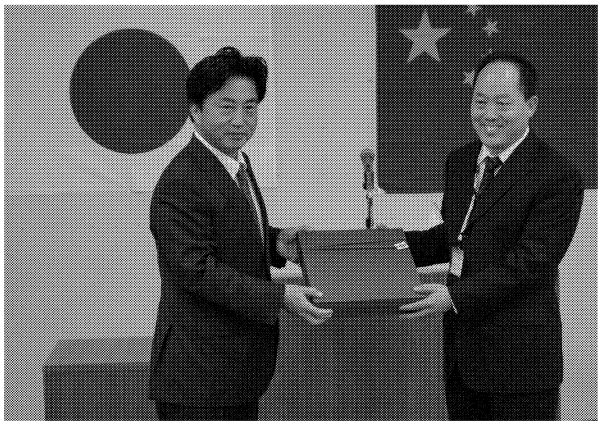
総社市教育委員会の皆さんと一緒に（総社市表敬訪問）

草の種を中国の先生に見せる児童（稲城市立稲城第二小学校）

館長より説明を受ける（岡崎嘉平太記念館）



書の実演を行い、教育長（左）へ贈呈（総社市歓迎夕食会）

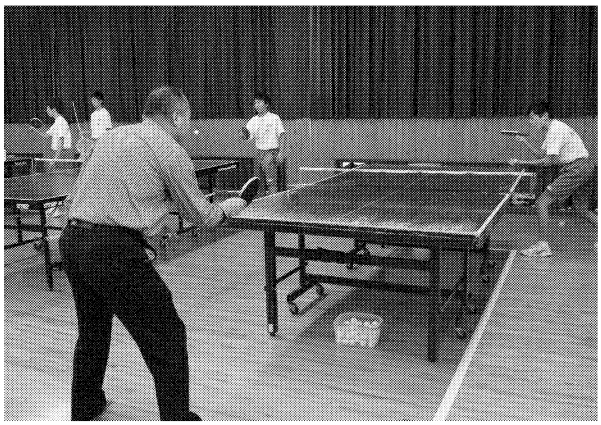


総社市長（左）より記念品を受け取るグループ長（右）右（総社市市長表敬）

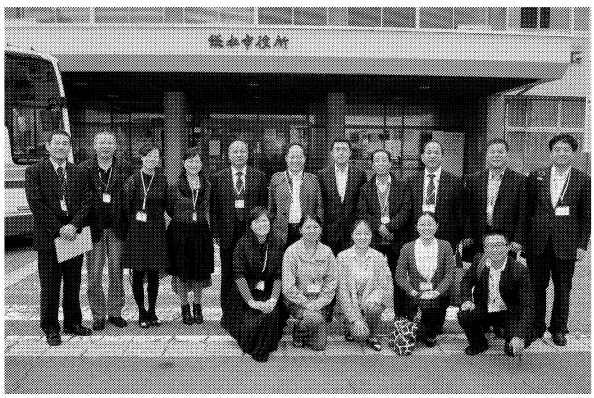
児童からの手紙（総社市立常盤小学校）

歌を披露する訪問団（総社市立総社小学校）

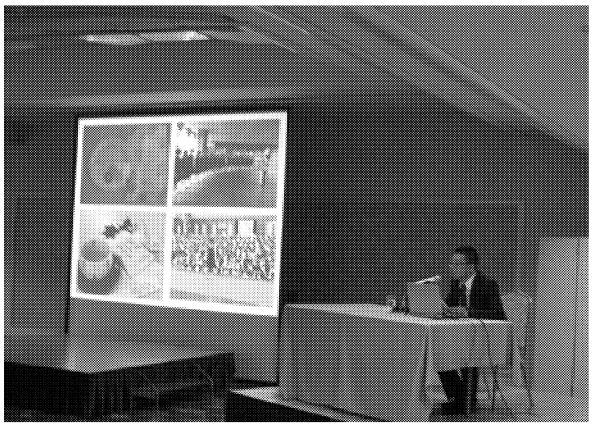
校長より歓迎のあいさつ（総社市立総社西中学校）



部活動見学で卓球部の生徒と対戦（総社市立総社東中学校）



市庁舎にて総社市教育委員会と一緒に（総社市教育委員会）



Ｂグループの発表（報告会）

◆付録 6．プログラム写真（Ｃグループ）

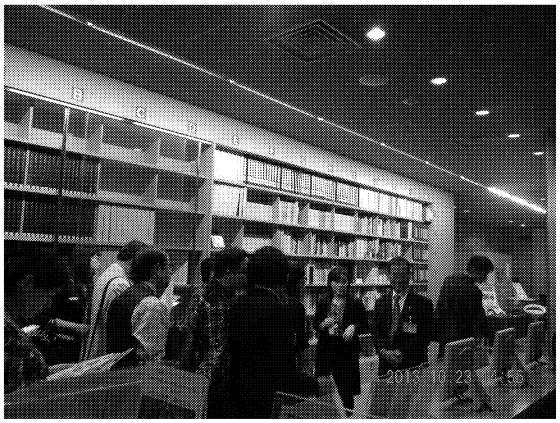
団長（右から５番目）、長崎市長（左から６番目）、長崎市教育長（右から４番目）を囲んで
左から３番目が秘書長、同じく５番目がグループ長（長崎市張、長崎市教育委員会表敬訪問）

生徒との意見交換（聖徳学園中学・高等学校）

長崎市教育委員会の出迎え（長崎空港）

長崎市長（右））長崎市教育長（中央）表敬訪問

日中の参加者が共に手をとって歌う（長崎市歓迎夕食会）

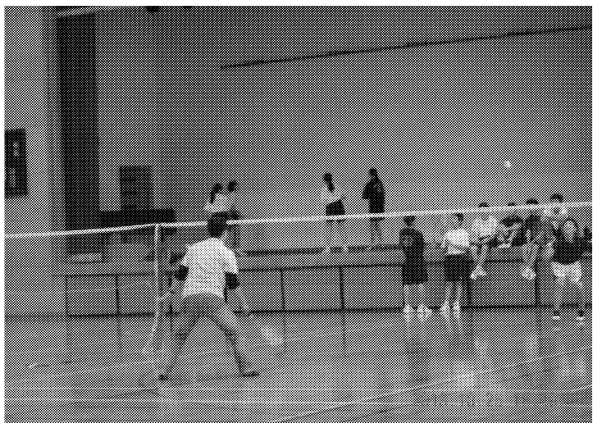


平和施設見学（長崎市）

グループ長（左）からの中国の古典書の寄贈
（長崎市商業高等学校）

児童たちによる「さるく」ガイド（長崎市大浦小学校）

児童たちとのじゃんけんゲーム（長崎市朝日小学校）



部活に参加する訪問団員（長崎市片淵中学校）

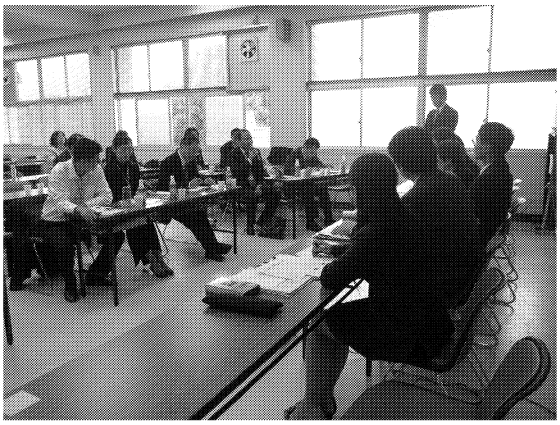
訪問団を見送るホームビジット家庭と長崎市教育委員会の皆さん（長崎市）

◆付録 6．プログラム写真（Dグループ）

和歌山県教育委員会のみなさんと（和歌山県教育庁表敬訪問）

地理の授業にて小グループで生徒と交流（公文国際学園）

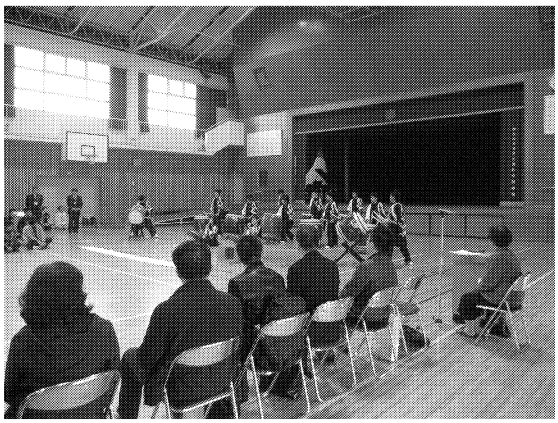
東照宮御舟歌の披露（和歌山県歓迎夕食会）



日中教員の意見交換会（星林高等学校）

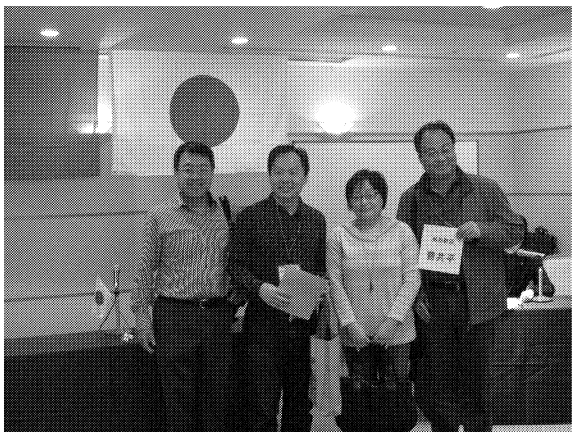
和歌山県教育庁表敬訪問にてグループ長の挨拶

高野山奥之院を散策



太鼓の演奏（きのかわ支援学校）

中国語の授業で生徒と交流（和歌山県立橋本高等学校）



ホームビジット対面式(和歌山県)

エコ・エデュテイメントパークにて
（資源リサイクルセンター）

ACCU から各グループ長へ記念品贈呈（閉会式）

◆付録 7．過去のプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2002 年 12 月 1 日～14 日	東京都、和歌山県、岡山県、広島県、高知県、大阪府、京都府	97 名
2003 年 11 月 26 日～12 月 9 日	東京都、熊本県、愛知県、島根県、徳島県、大阪府、京都府、奈良県	100 名
2004 年 11 月 18 日～12 月 1 日	東京都、宮城県、長崎県、宮崎県、沖縄県、大阪府、京都府、奈良県	99 名
2005 年 10 月 18 日～31 日	東京都、長野県、福井県、和歌山県、宮崎県、大阪府	101 名
2006 年10 月 18 日～31 日	東京都、千葉県八街市、埼玉県、岐阜県、高知県、山口県柳井市、大阪府、奈良県	135 名
2007 年 10 月 16 日～29 日	東京都、千葉県八街市、岡山県総社市、富山県南砺市、三重県、岐阜県、大阪府、奈良県	135 名
2008 年 10 月 14 日～27 日	東京都、宮城県気仙沼市、福島県、京都府与謝野町、香川県、福岡県北九州市、大阪府、京都府	133 名
2009 年10 月 13 日～26 日	東京都、岡山県総社市、熊本県植木町、沖縄県那覇市、千葉県成田市、埼玉県さいたま市、大阪府、京都府	142 名
2010 年 10 月 12 日～25 日	東京都、秋田県大仙市、滋賀県近江八幡市、宮城県気仙沼市、長崎県壱岐市、長崎県、大阪府、京都府	130 名
2011 年 10 月 12 日～23 日	東京都、山口県美祢市、熊本県荒尾市、東京都多摩市、岡山県総社市、徳島県、大阪府、京都府	134 名
第 1 班:2013 年 11 月 13 日～24 日 第 2 班:2013 年 12 月 1 日～10 日	第1班: 東京都、大阪府 第 2 班: 東京都	第 1 班: 50 名 第 2 班: 49 名
2013 年 10 月 20 日～28 日	**東京都、熊本県荒尾市、岡山県総社市、長崎県長崎市、和歌山県、大阪府**	**59 名**

●国際連合大学 2013-2014 年国際教育交流事業●
中国教職員招へいプログラム
実施報告書

2014 年 3 月
編集・発行

国際連合大学[UNU]
〒150-8925　東京都渋谷区神宮前 5-53-70

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]
〒162-8484　東京都新宿区袋町 6 番地　日本出版会館
電話 (03)3269-4498　　URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by Waco Inc. [250]
©2014　Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO(ACCU)